

# 玉 手 山 遺 跡

玉手中学校用地内埋藏文化財調査

1985年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

玉手山遺跡の調査は、柏原市教育委員会が主体となって実施するようになってから4年目を迎えます。これらの調査によって得られた成果は、遺跡の実態が把握され、地域の人達やさらに多くの人々の身近な歴史となりつつあることは喜こばしい事です。

以前の調査は、玉手山古墳群の前期古墳を中心とした調査が多い傾向を示していましたが、最近では、古墳時代中期から後期に至る古墳や奈良時代の古代寺院址及び古墳時代から奈良時代にかけての集落址等の遺構や遺物が広範囲に発見されるようになりました。

今回の調査は、これまでの遺跡の調査とは若干の趣旨を異なる条里遺構の調査です。最近の開発によって次第にその姿も消えかけていますが、今なお空から見れば、整然とした方形区画の水田や住宅地が遺存しています。この条里の時期や規模・性格等を知ることは急務であると考えます。調査によって多くの畦畔が検出され、水田面も3面以上を確認しました。また、その下層から、鎌倉時代の屋敷址の遺構や遺物が多く出土しました。条里の時期を解明する重要な成果です。

今回の調査にあたっては、地元の方々を始め、柏原市開発公社、ならびに調査関係者各位に種々な御協力をいただき深く感謝の意を表します。

昭和60年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和59年度に実施した学校建設に伴なう事前緊急発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会　社会教育課　北野　重を担当者として2次にわたり実施した。調査は、昭和58年12月7日から同年12月26日までを第1次調査、昭和59年3月26日から同年4月28日までを第2次調査として実施した。
3. 調査の実施及び本書の作製にあたっては、多くの方々に参加及び協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

石田 博、竹下 賢、花田勝広、安村俊一、桑野一幸、田中久雄、広岡 勉  
大塚淳子、松田光代、上條裕典、秋田大介、石田成年、藤岡弘子、中田ゆかり  
松村富子、森下尚美、藤本直美、乃一敏恵、松成早苗、坂本道子、横関勢津子  
吉居豊子、奥野 清、道旗甚蔵、守口喜信、谷口鉄治、麻栄三郎、川端長三郎  
朝田行雄、山田貞一、分才春信、西岡武重、山本芳一、井上岩次郎  
大谷女子大学助教授 中村 浩氏、大阪府教育委員会文化財保課課 尾上 実  
氏、高槻市教育委員会 橋本久和氏には、御指導・助言を賜わった。

4. 遺物の整理・実測は、北野、松田光代があたった。
5. 実測中に表示した方位は、磁北、標高は、T. Pである。
6. 本書の編集、製図、写真、執筆は、北野、松田が担当した。

## 目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 位置と環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 第1次調査.....	5
第1節 調査の概要.....	5
第2節 遺物.....	16
第4章 第2次調査.....	18
第1節 調査の概要.....	18
第2節 遺物.....	31
第5章 まとめ.....	55
第1節 水利と小字.....	55
第2節 遺構と遺物.....	58

## 挿 図 目 次

図-1 玉手山遺跡.....	4	図-17 建物3・5.....	24
2 調査区位置図.....	5	18 建物4 .....	25
3 第1・2次調査区.....	6	19 土塙3・4・25.....	27
4 第1・2トレンチ.....	8	20 土塙5・7・16・18.....	28
5 第3トレンチ.....	9	21 大溝1出土遺物その1 .....	32
6 第3トレンチ建物1.....	11	22 大溝1出土遺物その2 .....	33
7 第3トレンチ建物2.....	12	23 大溝2出土遺物 .....	35
8 第3トレンチ小溝2.....	13	24 墨書き器 .....	36
9 第4・5トレンチ.....	15	25 大溝3出土遺物 .....	37
10 土偶.....	16	26 土塙7出土遺物 .....	38
11 第1次調査出土遺物.....	16	27 土塙16出土遺物その1 .....	40
12 第2次調査地区割図.....	18	28 土塙16出土遺物その2 .....	41
13 第2次調査遺構図.....	19	29 砥 .....	42
14 大溝1・2 .....	20	30 その他土塙出土遺物 .....	43
15 大溝3 .....	21	31 ピット出土遺物 .....	44

16 建物 1・2	23	32 包含層出土遺物	46
図-33 包含層出土遺物	47	図-37 その他出土遺物	54
34 磁器	48	38 条里と水利	55
35 木製品その 1	51	39 地構図	56
36 木製品その 2			

## 図 版 目 次

- 図版 1 調査区風景 北側と東側風景
- 2 第一トレンチ 全景と条里下層堆積土
  - 3 第二トレンチ 全景と鞋跡
  - 4 第三トレンチ 全景と建物群
  - 5 第三トレンチ 石を使用した遺構
  - 6 第三・四トレンチ 調査風景と第4トレンチ全景
  - 7 第二次調査区全景 遺構掘削前と後
  - 8 第二次調査区 第5区と6・7・8・9区
  - 9 第二次調査区 大溝1全景と遺物出土状態
  - 10 第二次調査区 大溝2全景と断面
  - 11 第二次調査区 大溝3全景と断面
  - 12 第二次調査区 大溝3遺物出土状態
  - 13 第二次調査区 土爐7全景と遺物出土状態
  - 14 第二次調査区 土爐16全景と遺物取上後
  - 15 第二次調査区 土爐18全景と掘削後
  - 16 第二次調査区 土爐18側壁とサブトレンチ掘削後
  - 17 調査風景、第2調査区遺構掘削風景と降雨後の風景
  - 18 出土遺物 その一 大溝1出土遺物
  - 19 出土遺物 その二 大溝1出土遺物
  - 20 出土遺物 その三 土爐16出土遺物
  - 21 出土遺物 その四 包含層出土遺物

# 第1章 調査に至る経過

柏原市は、大阪府の衛星都市としての位置と環境を持ち、商工業の発達と共に都市化が顕著になり、住宅地の開発も多くなつた。その結果として、人口の増加があり、公的機関に多くの問題が提起されるようになった。学校教育にもこの人口の増加は、生徒数の増加、学校のマンモス化、学校敷地の狭小を招き、教育環境の悪化が避けられなくなつたのである。

昭和58年、柏原市円明町、旭ヶ丘町で仮称国分第二中学校の建設が予定され、事前の試掘調査及び本調査が実施された。当該地域は、玉手山古墳群の玉手山9号墳が存在し、前期古墳として著名であり、墳丘・葺石が予想以上に良好な状態で遺存している事が判明し、竪穴式石室の構造、墳丘上のピット列など次々と貴重な成果が得られた。柏原市教育委員会では、このような貴重な成果に基づいて、何らかの方法で9号墳を復元するという条件で、中学校建設関係各機関と協議を重ねたが、本調査途中、諸般の事情により当地予定地での中学校建設を断念するという結果に至った。

柏原市土地開発公社は、柏原市玉手町（概算総面積 21000m<sup>2</sup>）を再度仮称第2国分中学校建設用地として計画した。柏原市教育委員会は、当該地が玉手山条里遺跡である事から、同市開発公社と協議を持ち、調査する事になった。

調査は、昭和58年12月7日より同月26日まで実施した。その結果、条里遺構は、各トレンチにおいて検出された。また、一部には、鎌倉時代の遺構が検出され、広範囲に拡がる可能性があるところから、再度協議を持ち、校舎建設予定地における調査を実施する事となった。調査対象地は、遺構が検出される当該地の南半部に限定した。また協議過程において、遺跡保存の為、遺構が検出される地区の校舎建設位置の変更についての考慮も成されたが付近住民との学校建設計画の説明にあたり、日照権や校舎位置について幾多の約束をしている事から変更できない由の返答により上述の経過と中学校開校時期をも考慮し、調査の実施に至った。

その結果、条里に添った大溝を基準とした遺構を多数検出した。遺構は、大溝、小溝、建物土塗、井戸、ピット、焼土塗等があり、その伴出遺物から、12世紀から13世紀にかけての時期の遺構である事が判明した。遺物は、瓦器を中心として、土器、須恵器、磁器、石器、木器等多種に及ぶ。この中世紀の遺構は、条里の一町四方区画内に限定される可能性が高く、当地域及び当時期における集落の在り方が観測的ながら明白となった。遺跡は単時期のものであり条里遺構は、これら下層遺構以降に形成した事を示している。

発掘調査にあたっては柏原市土地開発公社および地元の各位から多分なご理解とご協力をいただいた。ここに記して謝意を表します。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県の境に連なる生駒山脈の麓にあたる。広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63km、面積24.77km<sup>2</sup>平方メートルを測り、その3分の2が丘陵と山地が占める小都市である。

大和川が生駒山地と狭小な平野部を分断するように東西方向に走る。この大和川を中心として、市域を流れる大小の河川は、大きく3つの水系に区分される。1つは、周辺山地から源を発して大和川に注ぐ大和川水系のもの。および築留付近から分流して河内平野を貫流するものそれに、生駒山地西斜面を恩智川に流れ込む渓谷の小さな流れの3つである。これらの水系の河川によって拓ける扇状地は、古代遺跡にとって大きな意味を持つものが多い。1番目の水系として、清水谷、青谷川、谷川、原川、石川があり、広範囲に拡がる平野を持たないが、小集団をまかなくに足る土地が認められる。特に、玉手山丘陵の東西を走る原川と石川は、水量的にも平野面積にしても群を抜いて大きい。大阪府の遺跡分布地図によると、弥生時代の集落が点在しており条件的に良好である。また、玉手山丘陵自体海拔20~100m前後の割合低い丘陵であり、古墳の築造や集落の立地として好適である。狩獵や採集生活の縄文時代やそれ以前の時代の住環境としても良く、弥生時代から古墳時代あるいは中世から近世の戦闘や防衛的性格についても重要な位置を占める。鎌倉時代の武士集団の鍛練場所としても良好であろう。

2番目の山ノ井川、谷山渓、宮山渓、岩崎谷の水系は、南北方向に流れる恩智川に直交している。生駒山地は、軟質の花崗岩によって出来ている為、山崩れ、土砂流出が激しい事が特徴である。それを示すように、小河川にかかわらず大きな扇状地を有している。生駒山地西麓には東大阪市や八尾市にかけて多くの遺跡が存在するが、柏原市域には特に間断なく密集している事が最近の調査で知られるに至った。これは、古墳時代から奈良時代にかけて、国家形成の中心地域のお膝元である事が最大の理由であろう。

第3番目は、長瀬川、了意川である。この河川縁辺は、河内平野の中心に属し、大遺跡が点在する。特に弥生時代の遺跡が多い。この水系の基幹ともいるべき場所に船橋遺跡がある。この遺跡は、縄文時代から奈良時代にかけての大遺跡である事は周知のとおりである。

玉手山遺跡は、上述の1番目の水系を持つ遺跡である。柏原市片山町、玉手町、円明町、旭ヶ丘1、2丁に拡がる。標高20数mの平野部が、原川と石川の周辺に拓け、その間に最高80mの標高差を持つ南北方向に連なる丘陵がある。古墳時代前期の前方後円墳は、丘陵の全体に分布するが、弥生時代から中世に至る遺跡は、割合低丘陵の北半に集中している。

## 第2節 歴史的環境

大化の革新によって、全国は国、郡、郷に行政区画された。これは、従来の各地豪族による人民支配から天皇と官僚による直接支配への変遷を意味している。柏原市域は、大県郡の全域と安宿郡の一部（羽曳野市飛鳥と駒ヶ谷）を除いた地域、そして志紀郡の一部を含んでいる。

安宿郡はさらに賀美郷、尾張郷、資母郷に分かれる。安宿郡の郡衙は賀美郷（羽曳野市飛鳥の地）に置かれていたと考えられる。しかし、尾張郷の南方に郡衙としての可能性を持つ地域もあり今後の検討を要する。

土地制度についても、農地は郡単位で方形に区画される条里制を施行し、男女長幼身分に応じた均田法がとられる。この条里制を示す区画はその後の時代の変革によっても壊されずに遺存している事が多い。大県郡、志紀郡、また、安宿郡においてもよく条里遺構が現在まで遺されている。これらの条里遺構については、考古学的な調査は行なわれておらず、その初源期が何時の時代になるのか今後の検討をするものが多い。

鎌倉時代には、幕府は権力の基盤を拡大する事に多大の努力をはらってきた。河内にも武士団が領主として君臨するようになり、はやくから御家人として編成されている。主なものとして、介平忠常の乱を平定した事によって河内守に任せられた源頼信こと河内源氏は、古市郡古市郷あるいはその後移館し、大国郡塙井を中心に勢力を確固たるものとする。また、旧大和川北部にあたる河内、若江、茨田の諸郡を領有している水走氏が権力を振った。この他にも、多田源氏、渡辺党や各々有力な土豪が本貫をもってそれぞれにその経済的・武力的基盤をして栄えてきた。当地域にも、玉手山丘陵と石川の間がその周辺に経済的基盤を見つけうる。

### 参考文献

大阪府誌3巻

柏原市史1巻

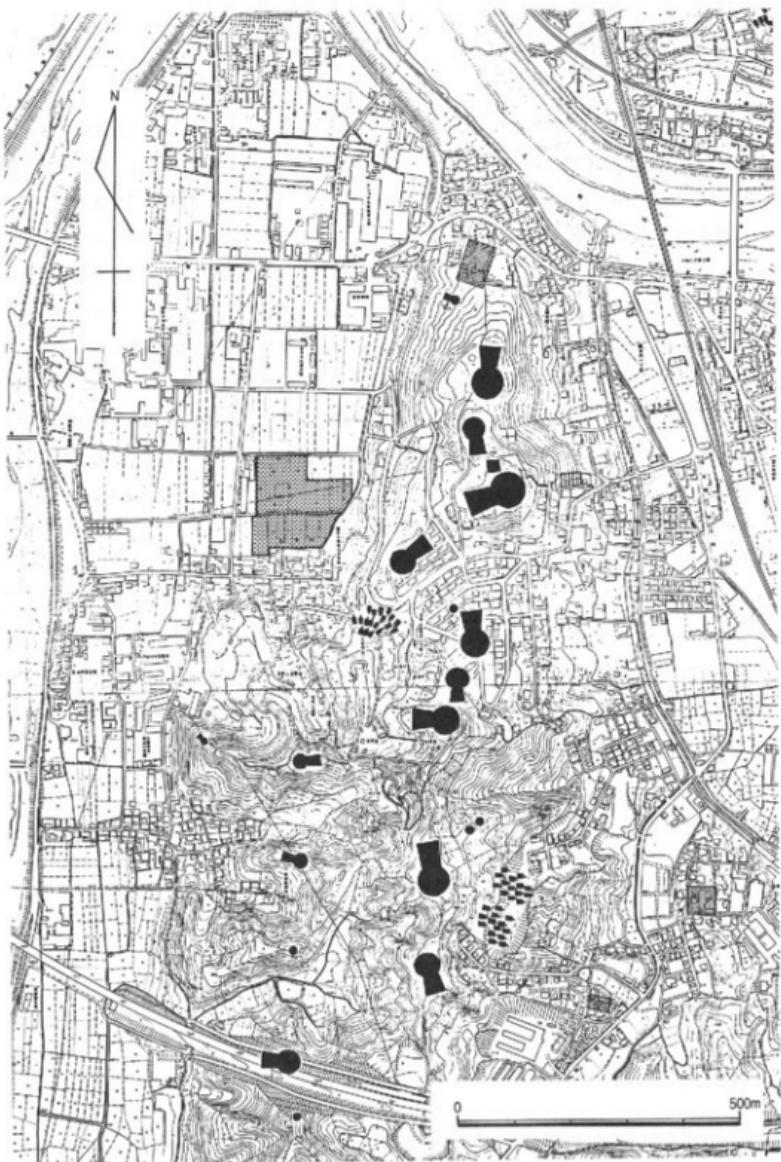


図-1 玉手山遺跡

# 第3章 第1次調査

## 第1節 調査の概要

第1次調査は、昭和58年12月7日より同年12月26日までの17日間実施した。当地域における条里遺構は東西方向にはほぼ1町間隔に平行してみられるが、南北方向の起点が明確でない。調査区内において条里遺構の大畦畔は中央部に走る東西道路下に存すると考えられる。しかし、学校の予定地内に未買収家屋及び田畠があり、よってこの道路部分の調査は出来なかった。

限定された範囲内であるが、計5ヶ所のトレンチを設定した。北側から第1～4トレンチとし、第3トレンチ西側に予備的に第5トレンチを設定した。調査は、人力によって南北方向4m、東西方向10mの長方形のトレンチを基本とした。第3トレンチにおいて、条里遺構の下層から中世の建物の柱穴が検出された。この遺構の拡がりを確認するため、トレンチの拡張を実施した。その結果、建物の重複や溝、土塁等の遺構を多数検出するに至り、この下層遺構の西側への拡がりを確認したのが第5トレンチにある。各トレンチの遺構及び遺物を順を追って説明を加えていきたい。



図-2 調査区位置図



図-3 第1・2次調査区

### 第1トレンチ

南北2.9m、東西10.0m。当地域の条里遺構は、長地型である。この中の一つの畦を中心としてトレンチを設定した。

基本層序は上層から次の通りである。第1、2層は現耕作土の耕土とその床土である。各トレンチの土層観察においても同様に検出されている。この土層を掘削後第2の畦畔（第1の畦畔は現在の畦畔とする）が検出された。両側に40~60cmの測溝を有し、上面が約80cmの幅を持ち断面台形型の畦畔である。畦畔は青灰色粘質土（第7層）である。さらに掘り下げるに、第3の畦畔が検出された。第2畦畔よりも遺存がよく、約30cmの厚さ測る。両側に側溝らしき溝があるがはっきりしない。西側はやや深く掘り込まれている。上面が約70cmを測り、断面台形である。この畦畔も青灰色粘質土である。第3の畦畔を基準として、新らしくなるに従い東へ移動する。第2畦畔は約1.9m、第1畦畔は約1.5m移動している。これらの畦畔の時期差は明確でない。

出土遺物は、第1、2層から瓦器、土師器、須恵器、磁器、鉄滓が出土した。各片とも小破片で摩耗が多いものが多い。第3畦畔の同一面の第9層から瓦器、土師器、黒色土器、須恵器、磁器等の細片が出土したが、時期を明確にする事が出来ない。

### 第2トレンチ

第2トレンチは、東西を走る調査区中央の道路より約3m北側の場所である。第1トレンチの真南にある。南北1.5m、東西10.0mを測る。遺構として畦畔1、うね2、条里下層遺構として溝2本を検出した。第1の畦畔は、中央部に第1トレンチのものと同一直線上にある。第2の畦畔は、第1トレンチの第2畦畔と層位的に同一と考えられる。しかし、東西方向には第1畦畔より東側へ移動している。約2.0mのずれがある。この畦畔の東側は、幅約1mのうねが2条検出された。うね中央部には植物の抜き取り痕又は腐食痕が並んでいた。畑として使用された時期があったと考えられる。条里遺構の下層より検出された遺構の内、西側の溝を溝1とする。溝1はトレンチ西端に、幅95cm、深さ10cmを測る南北方向の小溝である。埋土は、青灰色砂質粘土である。遺物が出土しなかった。溝2は、溝1より約6.0m東側といったところで検出した。幅1.2m、深さ40cmを測り、溝1同様南北方向の小溝である。掘方断面は逆台形を呈する。埋土は上層から、青灰色砂質粘土、青灰色シルト、緑灰色粘土である。

出土遺物は、第1トレンチと同様の遺物である。数量的には約2倍位である。溝2の埋土中から土偶が出土している。縄文時代晩期の土器片も2点出土した。

### 第3トレンチ

第3トレンチは東西方向道路の南側約20.0mのところに設定した。当初、南北2.0m、東西10.0mのトレンチであったが、下層遺構を明確にする為拡張し、南北8.0m、東西13.0mとした。断面観察によると、第1、2層は第1、2トレンチと同一であるが、その下層に第3層と

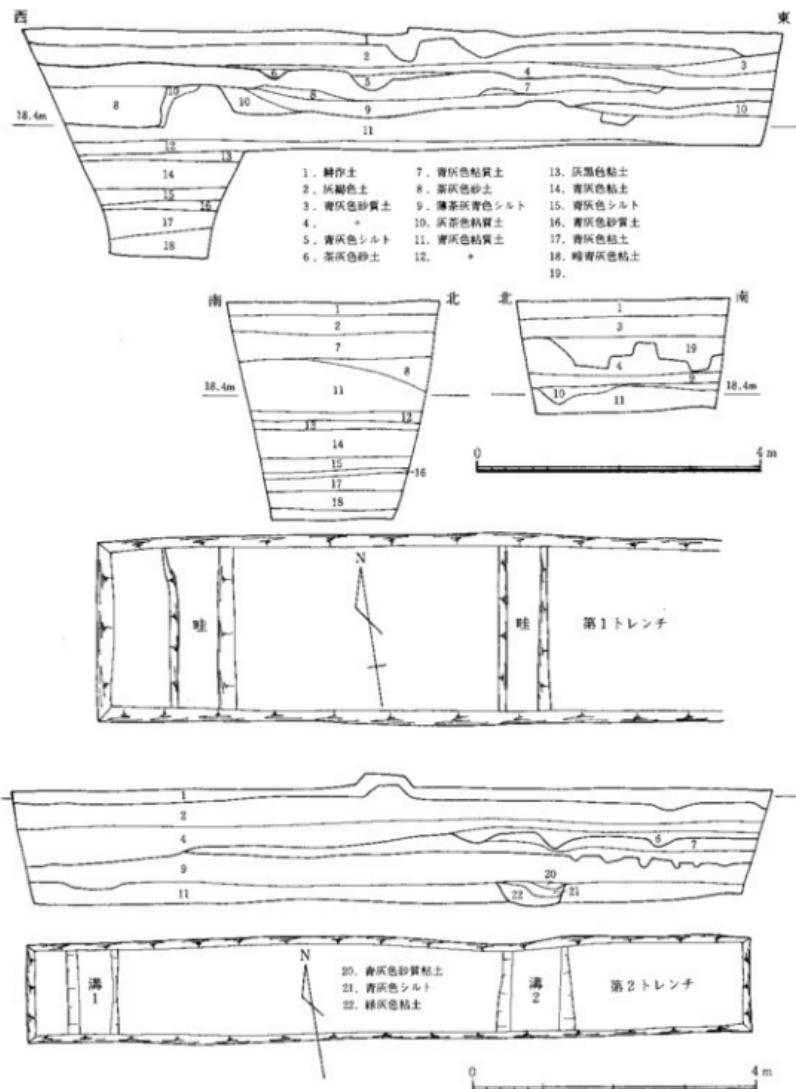


図-4 第1・2トレンチ

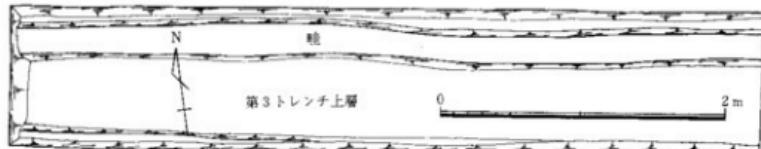
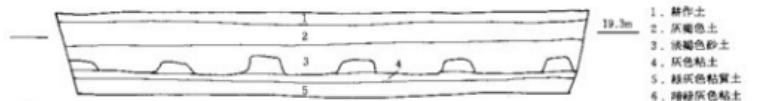
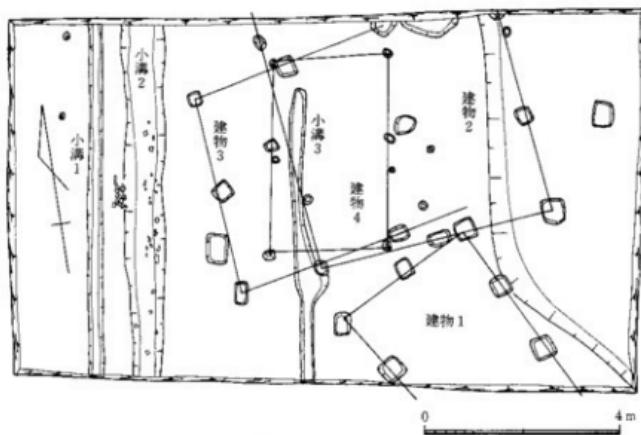


図-5 第3トレンチ

した灰褐色砂土が厚く堆積していた。この土層が条里遺構を削平しているかもしれない。畦畔は検出されなかった。単純な水平堆積を呈する。第5層とした緑灰色粘土は、地山と考えられる。この地山上で検出された遺構の明確なものについてのみ弱干の説明を加えたい。

小溝1 第3トレンチの西端部に検出した小溝で、南北方向に一直線に伸びており、横幅15cm、深さ8cmを測る。掘方断面は逆台形を呈する。埋土は明灰色微砂土で、出土遺物は、土師器、サヌカイトが少量出土した。この小溝の西側は東側の遺構検出状況とまったく相異し、区画性を持つ可能性がある。

小溝2 小溝1の東側約60cm離て平行するように検出された小溝である。南北方向には両方とも伸びており、横幅60~85cm、深さ12cmを測る。埋土は緑灰色粘土である。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、土釜、磁器、自然木片等が少量ずつ出土した。また、2~13cmの大の小石が混入しており、溝の西側肩中央部付近は特に集中し、溝の中へ落ち込むような状況を呈している。何らかの意味を持つと考えられる。たとえば、小溝の両端にかけた歩橋の痕跡か地割の印としてのものかであろう。人為的に並べた様子が見られる。

小溝3 トレンチの中央部に、小溝1、2に平行し、北側端部が途中で自然消滅している。横幅約15cm、深さ10cm未満である。出土遺物はない。

建物1 トレンチの南東隅にその北半だけ検出した建物で、6個のビットから構成され、建物方位は西へ22°傾く。2間×2間または2間×3間以上の建物である。柱間は、1.3~1.6mを測る。ビットは隅丸方角の掘方を持ち、柱穴は円形である。掘方一辺は、40~50cm、柱穴径15~18cmのものがある。埋土は、暗灰褐色粘質土で、下層に10~20cm大の根石が3個のビット底部に見られた。同建物直ぐ東側に土塹1がある。

建物2 トレンチ中央部に検出した建物で、2間×2間の総柱建物である。建物方位は、ほぼ磁北に添っている。柱間は、2.0~2.4mを測る。北側のビット列はトレンチ北端に接し、東側のビット列は、土塹1の内側に入り込んでいる。ビットは、隅丸方形を主体に、三角形状のものも見られる。ビット掘方径は、25~50cmとまばらで一定しない。特に、西側列のビットは総じて小さい。これは、ビットが掘られた地盤の堅さ又は高低差に關係するかもしれない。つまり、東側ビットは、土塹1の埋没後に掘削しており、柱穴底部に根石を置いている。柱穴径は、南東隅のビット13においてのみ確認され、20cmを測った。ビットの掘方形状は、底部が平底の逆台形である。各ビットの底部の標高を比較すると、各四隅に位置するビットは、他のビットのそれに比較して10~20cm程深く掘削されている。中央部に位置するビット19は、瓦や土師器、土釜が主に縦方向に並べられていた。それぞれ完形ではなく破片である。建物の地鎮祭のものが根石の目的に供したもののが不明である。しかし、第1次調査及び第2次調査を通じて同様な遺構の検出がなく、根石として仕様されているビットは、石をその底部に敷きかつ平坦面を上方に向いている。

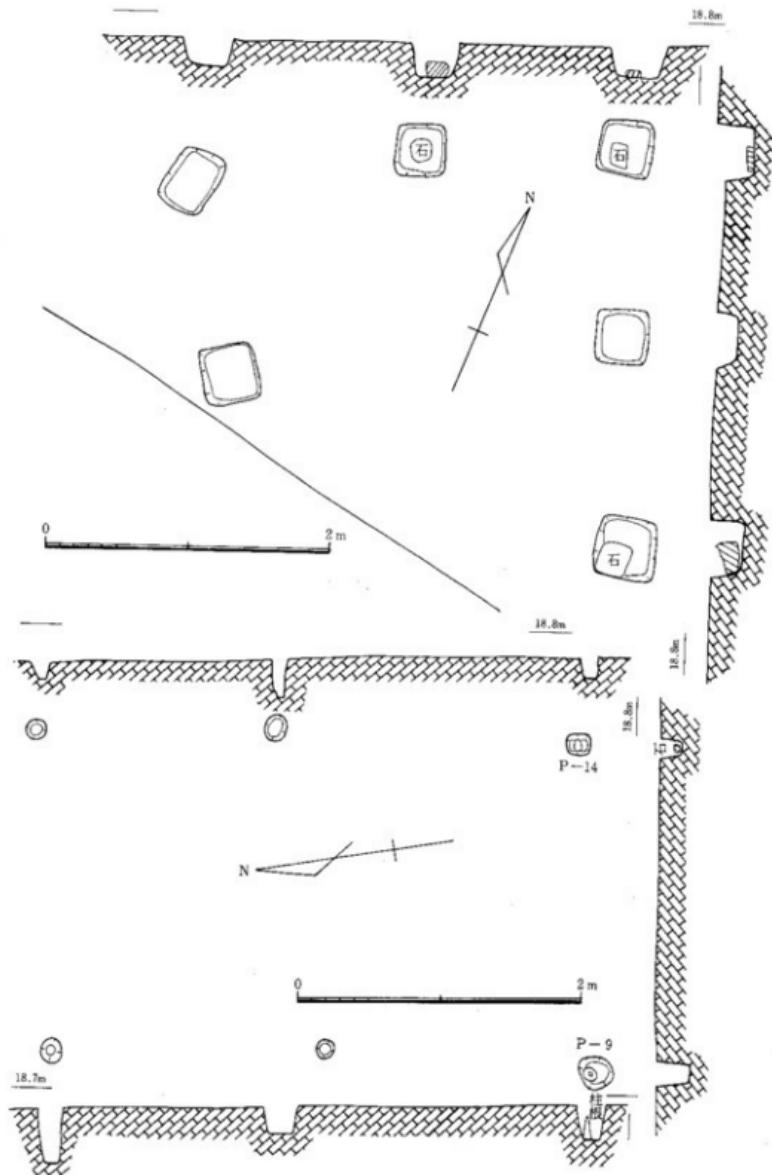


図-6 第3トレンチ 建物1(上)、4(下)

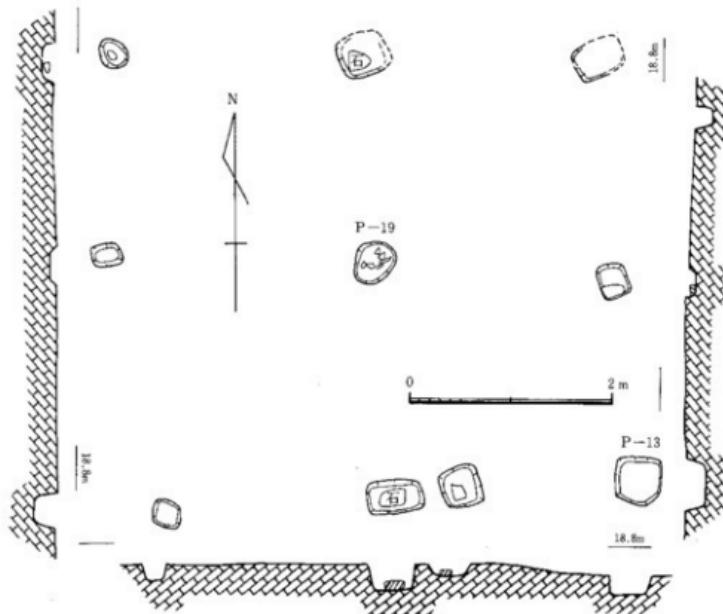


図-7 第3トレンチ建物2

**建物3** トレンチ中央部に建物2と重複するように検出した。その規模は2間×2間のものだろう。北東部のピットの並び方がやや変形である。建物方位は、西へ6°傾く。柱間は、1.7から2.0mで、南北にやや長く東西に狭い傾向がある。ピットは隅丸方形であるが、建物方向と掘方の向きが不揃いである。掘方形状は、底部が平底の逆台形である。ピット掘方径は、25～40cmを測る。深さは10～18cm遺存し、根石等は検出されなかった。

底部は、南西隅のピット22を基準にして、東側と北側へ深くなる傾向を持つ。地山面も同様に西から東へ、南から北へとわずかながらに傾斜している。

**建物4** トレンチ中央部に検出した建物で、建物2、3と重複する。この場所では、建替えが少なくとも3回あった事を示している。規模は、1間×2間である。建物の方位は、東へ9°傾いている。柱間は、南北1.7～1.9m、東西2.3mを測る。ピット形状は、隅丸方形、梢円、円形があり、円形が多い。ピットの掘方形状は、平底ないしU字底である。ピット径は、建物1～3と比べやや小さく、簡素で労力の少ない掘方である。15～25cmを測る。柱も掘方ぎりぎりまで占めていたものと思われる。ピット9には柱痕が残存していた。ピット14では、底部に根石を持つ。深さはそれぞれ一定しなく、15～40cmと差異がある。

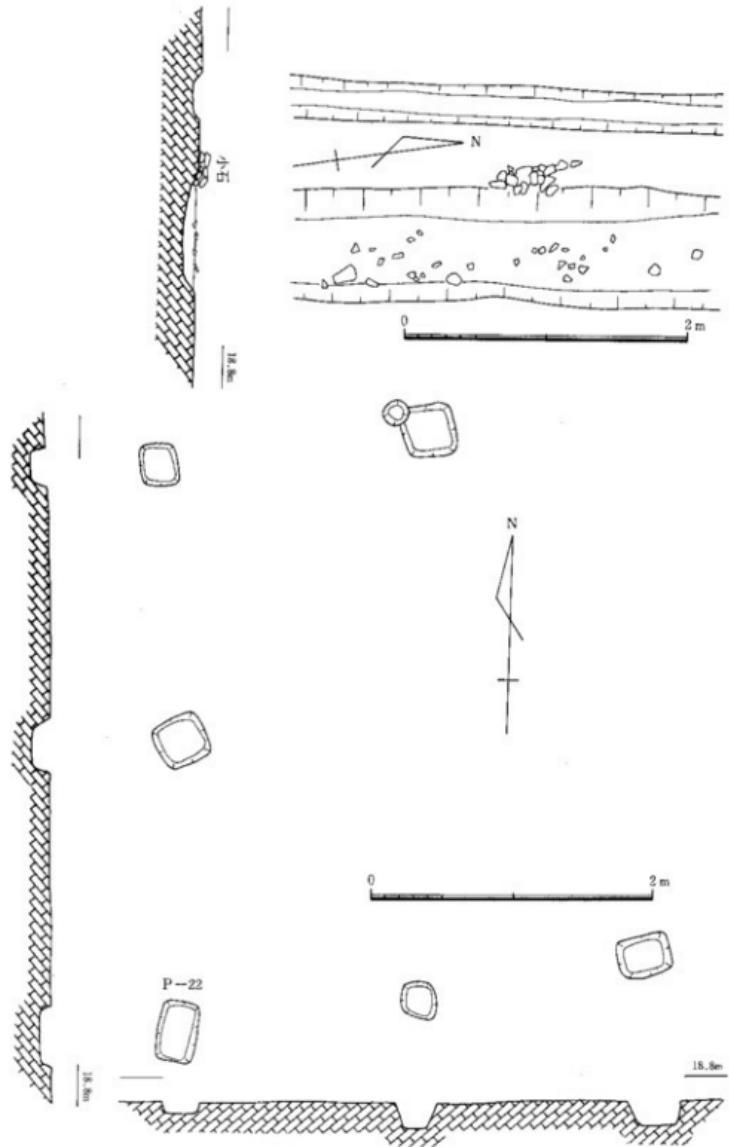


図-8 第3トレンチ 小溝2、建物3

**土塙1** トレンチ東端で検出した土塙で、東側および北側へ大きく広がる。検出規模は、南北7m以上、東西3m以上である。その西辺が、北側では南北方向を向き、南側で東側へ約45°屈折する。底部は西端から徐々に深くなり、一番深い場所で高低差30cmを認む。埋土は、暗緑灰色砂混じり粘土である。ほぼ中央部には焼成を受けた木片、藁、壁土らしきもの等がある程度の範囲で薄く堆積していた。家屋の焼け落ちたという状況ではなく、2次的に排棄されたものようである。

**その他の遺構** 以上の各遺構以外にも多数のピット、土塙等を検出した。建物となる可能性を持つピットもこの内に含まれるもの、今回の調査では明確に出来なかった。小さいピットの中には、後世の杭跡も認められた。

#### 第4トレンチ

**第4トレンチ**は、第3トレンチのさらに南側で設定した。南北4.5m、東西10.0mである。第3トレンチ同様条里遺構は検出されなかつたが、同層位下に遺構を検出した。南北方向の大溝とこの溝に流れ込む小溝、平行する小溝各1条である。

**大溝1** トレンチの中央部に東西幅2.2m、南北にはトレンチ外へ同様の状態で伸びている。深さ45cmを測る。掘方形状は、逆台形で底部はほぼ平底である。ほぼ条里の方向に平行する。埋土は、暗灰色粘土である。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器、磁器類が少量出土した。また、溝東側底部に30~50cm大の石が数個落ち込んでおり、東側平坦面から落下又は投込まれたものであろう。人工的な区画性を持つ大溝である。

**小溝1** トレンチ西端に大溝と平行した小溝を検出した。西側肩部は調査範囲内では検出されなかつたが、底部の形状から推しまり大きくならない。横幅は推定で約70cm、南北には大溝1と同様伸びている。大溝とは約2.2mの間隔がある。出土遺物は、土師器、瓦器片が出土した。

**小溝2** 大溝1に流れ込む小溝である。東南部から斜め45°位の方向に流れ込む。横幅60cm長さ4.5m以上、深さ10cmを測る。遺物は、土師器、瓦器が出土した。埋土は、暗灰色砂質粘土である。

#### 第5トレンチ

**第3トレンチ**の西側に設定したトレンチで、下層遺構の検出がなされるかどうかという主旨を持ち設定した。東西及び南北5.5mの方形のトレンチである。断面は、第3トレンチと同様であり、ほぼ水平堆積を呈する。第1、2層の下層には、淡灰色砂土が割合厚く堆積している。地山面は青灰色粘土である。青灰色シルト（第7層）上面で南北方向の平行する2条の小溝を検出した。恐らく条里に係わるものであろう。

出土遺物は、各層共極端に少なく、第2次調査によっても明らかにされたように下層遺構は検出されなかつた。

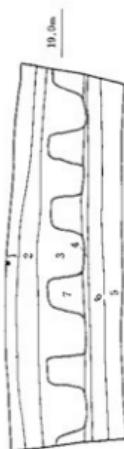
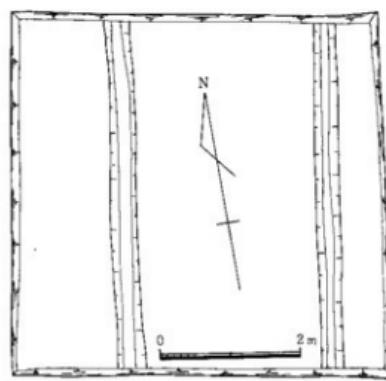
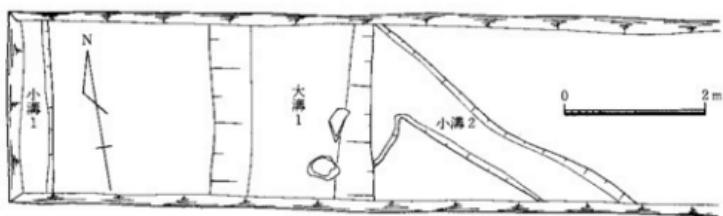
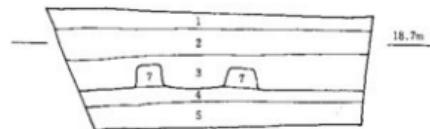
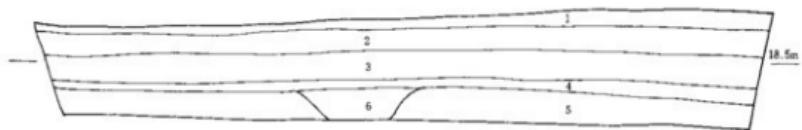


図-9 第4・5トレンチ

## 第2節 遺物

第1次調査から多数の遺物が出土した。コンテナ箱2箱分である。時期は、縄文時代、鎌倉時代の遺物であり、後者が大半を占める。

縄文時代の遺物は、土偶と土器2片がある。土器は晩期の遺物であり、土偶も同一胎土と焼成であり、同一時期と考えられる。色調は、灰茶褐色。胎土は、微砂粒を多く含み、石英、雲母石がみられる。

鎌倉時代以降の遺物は、各トレンチの遺構及び遺物包含層から出土した。第1、2トレンチでは、図化しうるものはなかった。第3トレンチ遺物包含層から土師器小皿（2～4）と大皿（11）、瓦器椀（16）が出土した。遺構出土遺物は、土塙1より土師器小大皿（5、12）、小溝1より小皿（6、8）、ピット13、9より小皿（7）と瓦器椀（17）が出土した。17は、表面摩耗により調整が不明である。ややしっかりした高台に丁寧なつくりの体部を持ち、外面にヘラ削りを施した痕跡がある。また、同一ピット内から、図化しえなかつたが、ヘラ削りを施した瓦器椀の破片が出土している。

第4トレンチ小溝1から土師器壺の口縁部（13）が出土した。色調は、茶灰色、胎土は砂粒を多く含み、器壁が薄く仕上げられて丁寧なつくりを呈する。大溝1より土師器小皿（9、10）瓦器椀（14、15）が出土した。土師器小皿は、7.2、8.0cmと小ぶりである。瓦器椀も高台のないもの（14）とわずかにその形骸化したもの（15）で口径も小さく、内面にわずかなラセン暗文を施している。

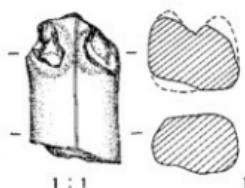


図-10 土偶

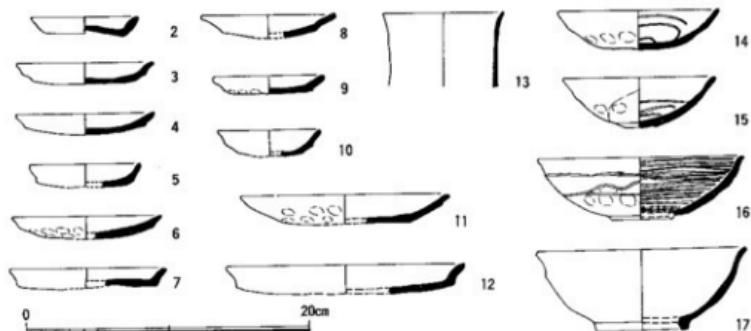
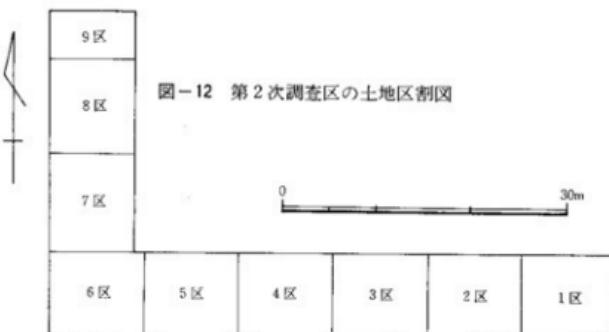


図-11 第1次調査出土遺物

## 第4章 第2次調査

### 第1節 調査の概要

第2次調査は、昭和59年3月26日から同年4月28日まで27日間実施した。調査は、下層遺構の検出を主眼として、東西方向の道路南側の校舎建設位置で実施した。上層部分は重機によつてすき取りを実施し、遺物包含層を人力により掘削した。調査範囲は、東西方向60m、南北幅10m弱の長方形のトレンチに、北西部に連続してL字型に東西9m、南北25mのトレンチを設定した。



下層遺構は、1～5区に集中して検出された。6～9区まではほとんど遺構は検出されなかつた。検出した遺構は、図-12に示すように、大溝、小溝、土塗、建物、井戸、その他ピット等である。主な遺構について弱干の説明を加えたい。

#### 大溝 1

1区南東隅に検出した大溝である。調査区に対して三角形状を呈し、幅2.6m、長さ12.0m以上を測り、ほぼ東西方向であるが、東端で幾分北側へ湾曲気味である。埋土は、黒青褐色粘質土、茶褐色粘質土である。これらの埋土は、水が淀んだ時の堆積土である。面積の割に出土遺物が多く、瓦器、土師器、須恵器、磁器、土釜、木器、自然木等がある。遺物は、上層と下層に量的に多少差はなく出土している。10～20kgの石も多数出土した。

溝の掘方断面は、幅の広い逆台形である。深さは、60～70cmを測り平底である。溝の南側肩は一部トレンチを設定したところ、溝幅約3.5mを測った。大溝の上面の標高は、18.35mである。地山傾斜は、南から北へ、西から東へわずかに下がっている。溝底部の高低差では、検出面積が少なく判明しなかつた。

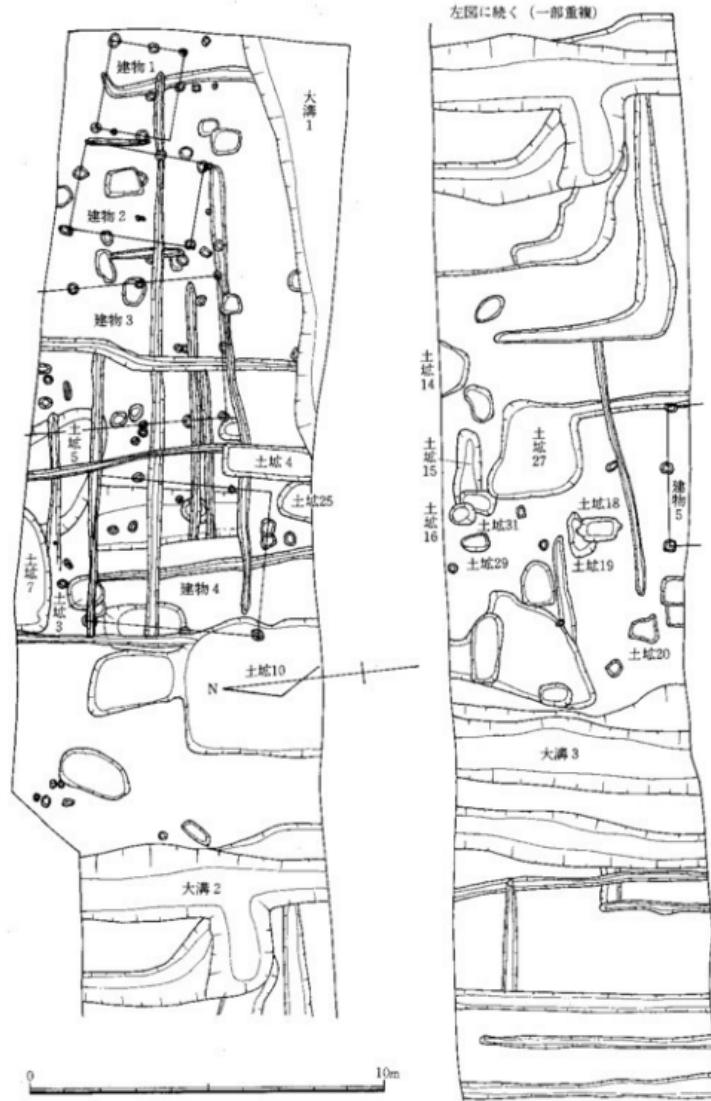


図-13 第2次調査区遺構図

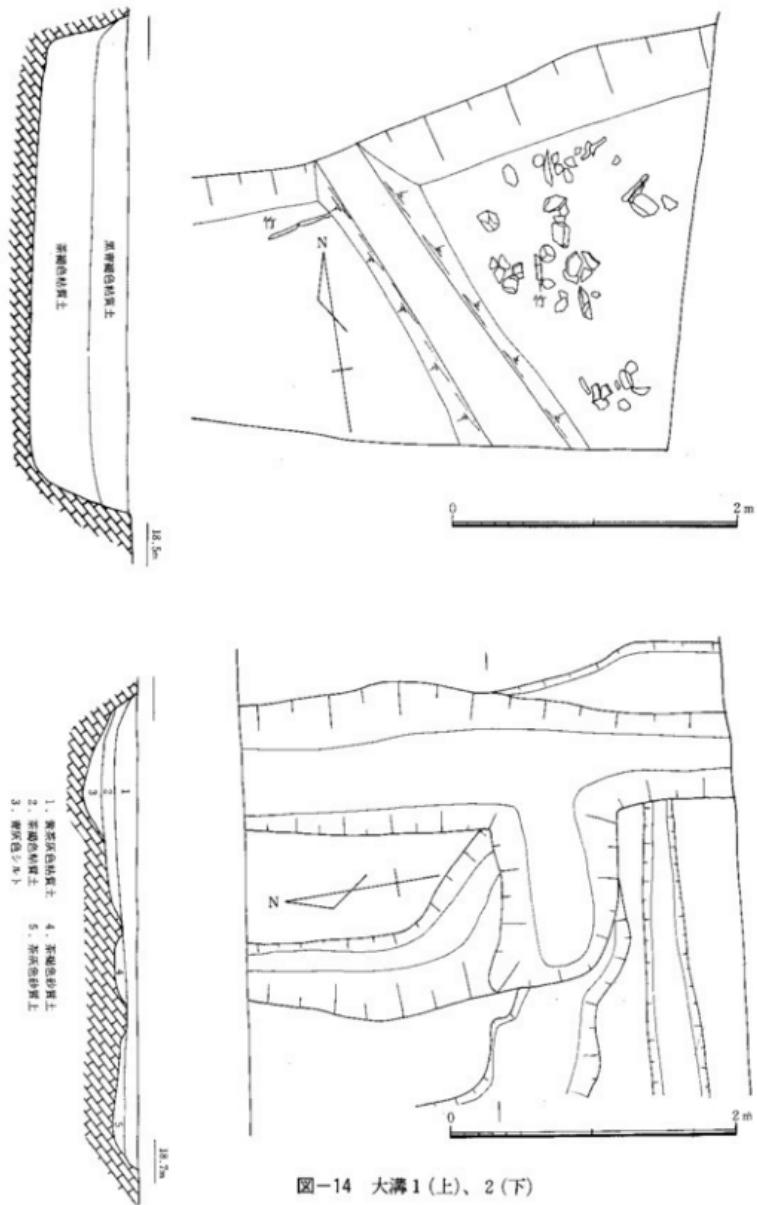


図-14 大溝1(上)、2(下)

### 大溝 2

3区中央部に検出した大溝である。調査区に対してほぼ直交するように南北方向に伸びている。深い部分（ほぼ直線的に伸びる）とその西側のやや低い溝状低地からなる。深い部分の溝は東側肩部から落ち込み、幅0.9~1.1m、深さ0.4~0.5mを測る。埋土は、上層から、黄茶灰色粘質土、茶褐色粘質土、青灰色シルトの3層に分かれる。中・下層は水が淀んだ時の堆積である。溝の西側には溝の引き抜き袋状部分がある。西へ約1m幅、幅0.8mである。底部は同じ位の深さである。この突出した袋状部分に溝が2本ある。1本目の溝は、袋状部分の北縁へ流れ込む南北方向の溝である。横幅0.4~1.2m、深さ10~15mを測る。埋土は茶褐色砂質土である。水の淀んだ時の粘土も多少見られた。2本目の溝は、袋状部分の西端へ流れ込む溝で、直ぐ北側へ字状に方向を変える。北端は途中で自然消滅している。最大幅80cm、深さ約10cmである。埋土は茶灰色砂質土である。この2本の溝を含む主流となる溝の西肩までは全体に低くなっている。溝廃絶後に人為的に整地されたのではないかと考えられる。

出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、磁器、木器等が多数出土した。

### 大溝 3

5区東端に検出した大溝である。溝2よりさらに西側で、方向は平行している。東西4.2~5.2m、南北には途切れない。深さ45~70cmを測る。

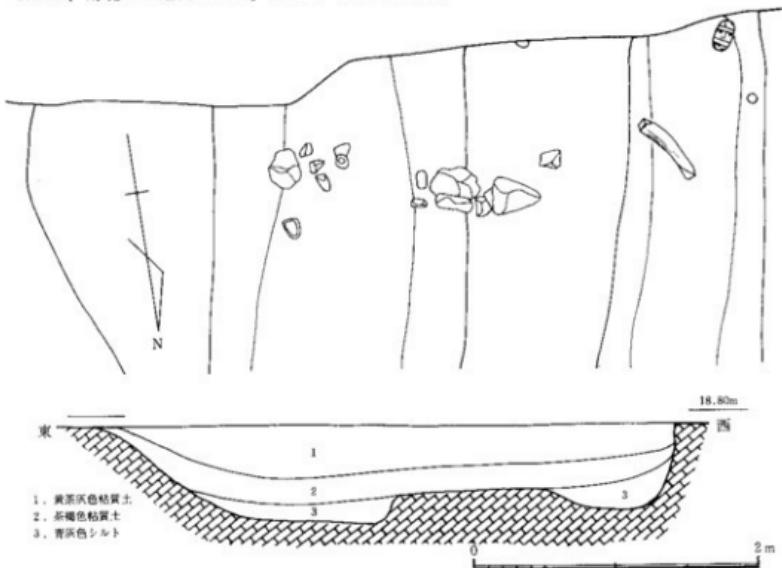


図-15 大溝 3

底部は平底であるが、中央部に台状の高まりが南北方向に連なる。両端底部より約20cm高い。台状上面は平坦でなく起伏が激しい。横幅は1.1m位である。埋土は、上層から、黄茶灰色粘質土、茶褐色粘質土、茶褐色粘質土と青灰色シルトの混層である。出土遺物は、瓦器、土師器須恵器、磁器、木器等がある。その他には、10~30cm大石が数個落ち込んでいた。自然木の多いものにも目を引いた。

この大溝は、第1次調査第4トレーニングの大溝とほぼ位置的に連続する可能性が強い。さらに北側へ続くとすれば、第3トレーニングにおいて検出された筈であるが、未調査部分で途切れるか東側へ屈曲するこの2者のどちらかであろう。

溝1、2、3の特徴は、いずれも条里に添うような方向と位置関係を持ち、遺物を多量に含み、水の流れを感じさせない淀んだ状態に埋造される埋土である。この事から、条里における水田用の水路として理解する事に無理を生じよう。むしろ、住宅空間を区画する性格を有するものと考えたい。

#### 小溝

小溝は、調査区全体から多数検出された。その内、性格を明らかにする小溝はあまり見られない。ほとんどが、南北方向ないし東西方向の向きを持ち、溝幅30~80cmを測る狭いもので、深さもそれ程でない。長さも直線的なものが多い。あえてその性格を考慮すれば次の事があげられる。1つは、大溝と平行し、大溝と同時期の区画性を有する溝、2つ目は、下層遺構の建物遺構等の雨落溝ないし排水溝である。3つ目は、下層遺構の埋没又は廃絶後に畠や田の耕作に供された折の溝の底部が遺存したのではないかと考えられる。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器等出土したが、それぞれ細片で実測出来るものは少ない。

#### 建物1

1区東側に検出した建物で、2×3間の規模である。建物方位は、東へ19°の傾きを持つ。ピットは隅丸方形というより円形に近いものが多い。径20~40cmを測り、大きさも30~40cmと20cm前後に分類される。柱間は、あまり一定せず、55~130cmとまばらである。建物自体簡素なものであろう。掘方形状は、逆台形で平底である。各ピットごとに高低差が著しい。

#### 建物2

1区中央部に建物1の西側に隣接して検出された。規模は2×3間の建物である。建物方位は、建物1とほぼ同一で、東へ19°の傾きを持つ。柱間は、東西方向1.3~1.8m、南北方向1.0~1.2mである。ピット形状は、隅丸方形、円形の2種類である。径30~45cmを測る。掘方形状は逆台形を呈し、底部の高さは一定ではなく深浅差が大きい。埋土は、暗灰褐色粘質土と茶灰色粘質土である。

#### 建物3

1、2区にまたがり、建物2の西側に検出した建物である。規模は、2間×3間である。

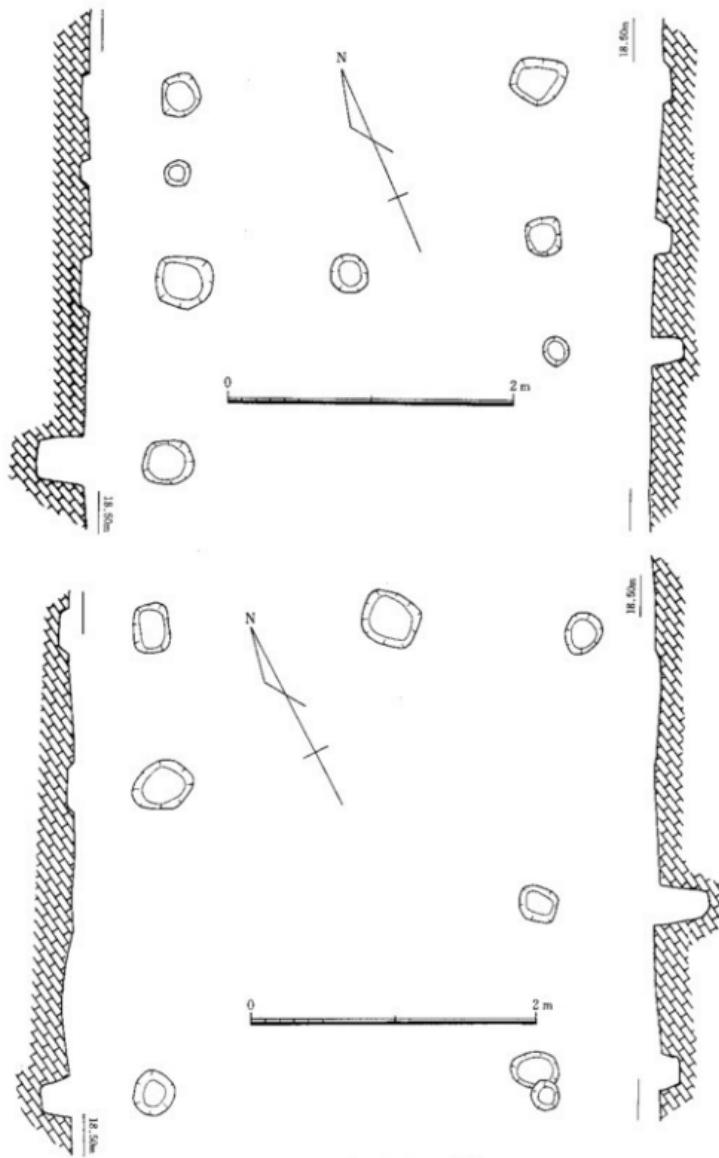


图-16 建物1(上)、2(下)

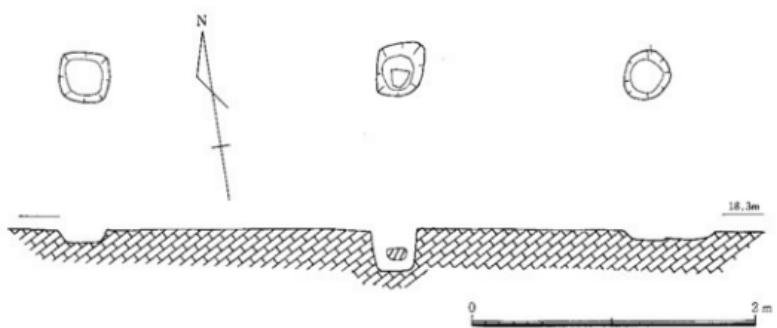
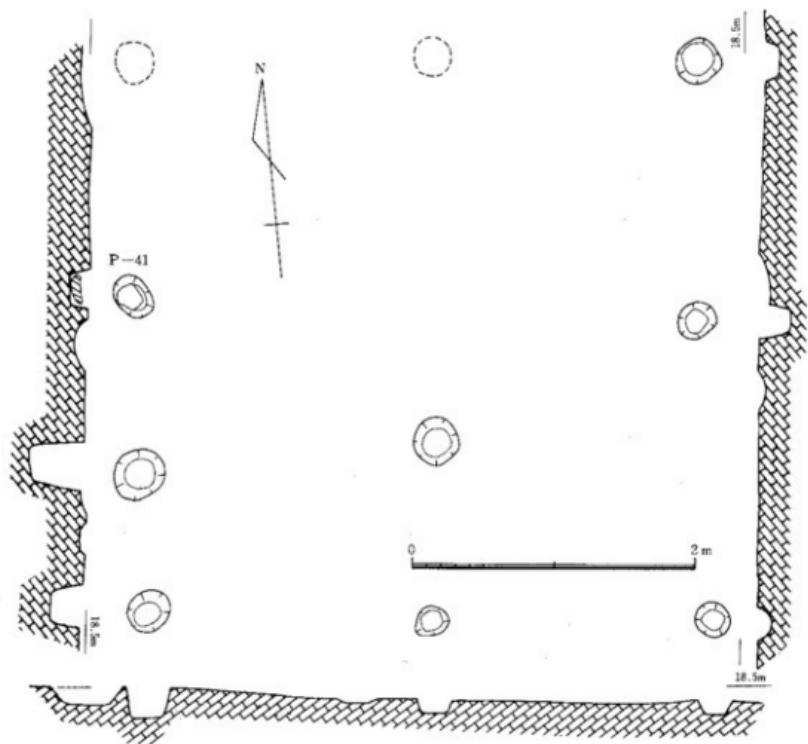


図-17 建物3(上)、5(下)

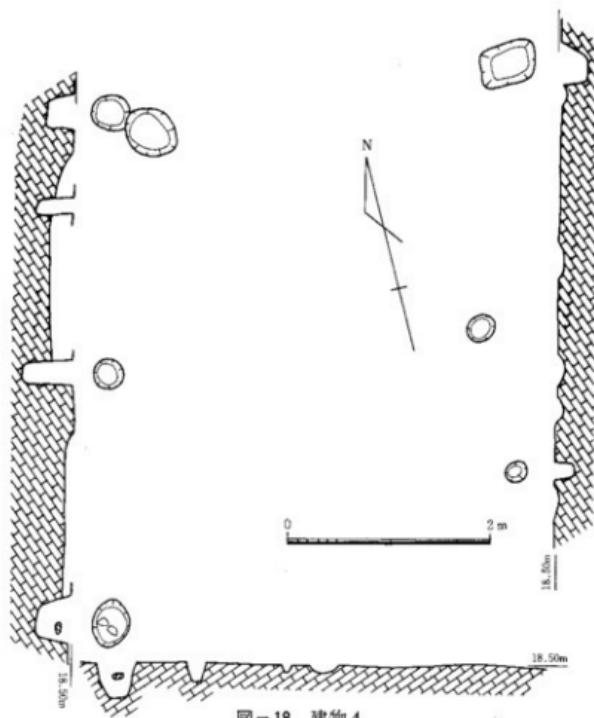


図-18 建物4

建物方位は、磁北に対し東へ5°振る。柱間は、東西方向1.9~2.1m、南北方向1.7~2.2mである。ピット形状は、円形がほとんどである。径25~35cmを測る。ピット掘方形状は、ほとんど長方形のものと逆台形のものがある。ピット41の底部には根石が見られる。ほぼ掘方一杯に入れてある。この建物の北西隅のピットは、土塙5によって切り取られている可能性がある。また、土塙7が直ぐ北側に隣接しており、何らかの関わりがあろう。

#### 建物4

2区中央部、建物3の西側に検出した2間×4間の建物である。建物方位は、磁北に対して15°東へ傾く。柱間は、東西に3.5m、南北に2.6mを測る。ピット形状は、円形又は橢円形である。径25~30cmと径50~60cmのものに分かれ、建物隅にあたるピットは後者に属している。建物北東隅のピットが土塙5によって削平されており、土塙の時期より後出的である。土塙4が建物南東隅に、また、土塙7が北側に位置している。

### 建物 5

4区南側中央部に、その北側ピット列だけを検出した建物である。東西方向2間、柱間1.8m、2.2mを測る。建物の方位は、東へ9°傾いている。ピット形状は隅丸方形を呈し、それぞれ35cmを測る。掘方形状は、逆台形で、両端のピット底部が約10cmと浅く、中央部のピットは約30cmを測った。中央部のピットは、根石と思われる石を持ち、この上に柱を建てたとする、両端のピットと同じ位の深さになる。

### 土塙 3

2区中央部やや北側に検出した土塙である。形状は、ほぼ円形を呈し、径1.0mを測る。掘方形状は、円弧状である。深さ26cmを測る。埋土は、上層が黄灰色粘質土、下層が黄灰色粘質土である。出土遺物は、瓦器、須恵器、土師器が出土した。どのような性格の土塙か不明である。建物4と重複するが、時期の前後関係は不明である。

### 土塙 4

2区南東部に検出した土塙で、大溝に続くと思われる。また、土塙25によって切られている。東西方向の大溝1に対して垂直に、大溝2に見られた袋状部分と類似している。南北2.55m、東西0.75mの長方形で、北側端で終っている。掘方形状は、端部から急に落ち込み逆台形を呈する。北端部も同様な落ち込み方である。埋土は、暗灰色砂質土(1)、黄灰色凝灰岩を小さなブロック状に含む暗灰色粘質土(2)、暗灰色粘質土(3)、青灰色粘質土(4)である。2層以下の堆積土は、水が淀んだ時の埋土である。南半部に自然木を尖らした径5~8cm杭が3本不規則に打ち込まれていた。出土遺物は、瓦器、須恵器、土師器、磁器、埴輪、サスカイト、木器、自然木が多く出土した。北側底部に正営位の完形瓦器碗が沈んでいた。

### 土塙 5

2区北東隅に検出した土塙である。橢円形を半截した形状でその北半は調査区外へ伸びている。長径4.0m、短径2.0mである。この土塙南側中央部に、50×40cmの方形をした焼土塊が見られた。焼土は、焼成を受け赤褐色土で、3~5cmの堆積層であった。しかし、その下層には熱影響を受けたと思われるふしきなく、2次の堆積の可能性が強い。よって、この土塙との関連は不明である。土塙埋土は、黄茶灰色粘質土、黄灰色凝灰岩を含む灰色粘質土である。掘方形状は、東側縁からゆるやかに落ち込み、西側では約45°の傾きを持ち落ち込んでいる。底は平底である。西側や北側へ少し傾斜している。底部の全面にわたり焼成を受けており、赤褐色及び茶褐色土に変色し硬化している。割合広範囲に火を使用していた遺構であろう。埋土中に凝灰岩が混入している土塙は、この他に、土塙4、7の中層埋土中に見られる。調査区の直ぐ東側の丘陵斜面は玉手山安福寺東横穴古墳群があり、この岩層が凝灰岩で出来ており、この素性が同じである。流れ込んだものではなく、何らかの必要から運び込まれたものである。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、焼土塊がある。量的に他の土塙と比べ少ない。

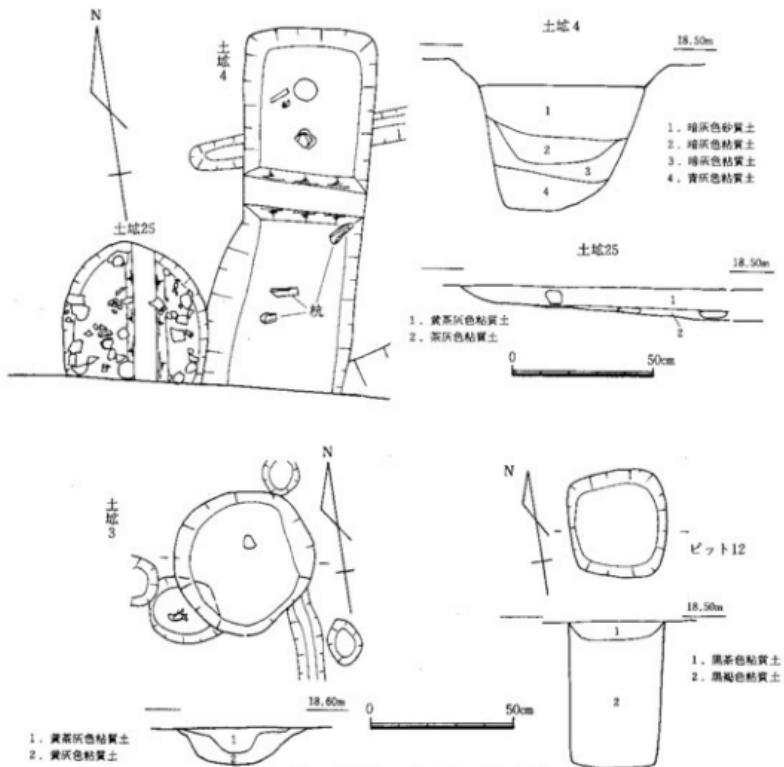


図-19 土塚 3・4・25、ピット 12

### 土塚 7

2区中央部に土塚 5 の西側に検出した。その南側一部だけで、さらに北側へ伸びている。横幅 3.5m、南北 1.2m 以上である。掘方形状は逆台形を呈し、深さ 0.7m を測る。埋土は、溝 1 と同様に水が淀んで出来たものである。上層から、黄茶灰色粘質土、暗灰色粘質土、青灰色砂質土である。中層には、黄灰色の凝灰岩の粉状のブロック塊が混入している。底部には、10~20cm 大の礫が、特に南西隅に固まって落ち込んでいた。南西隅から土師器小皿が数個斜面途中に落ち込んでいた。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、磁器、木器等がある。出土遺物の内、礫には焼成を受けたものもあり、土塚 5 が火を使用した痕跡が認められる事や、土釜の破片も多数出土しており、台所の近くではなかったかと思われる。しかし、それを明確にする遺物や遺構はない。

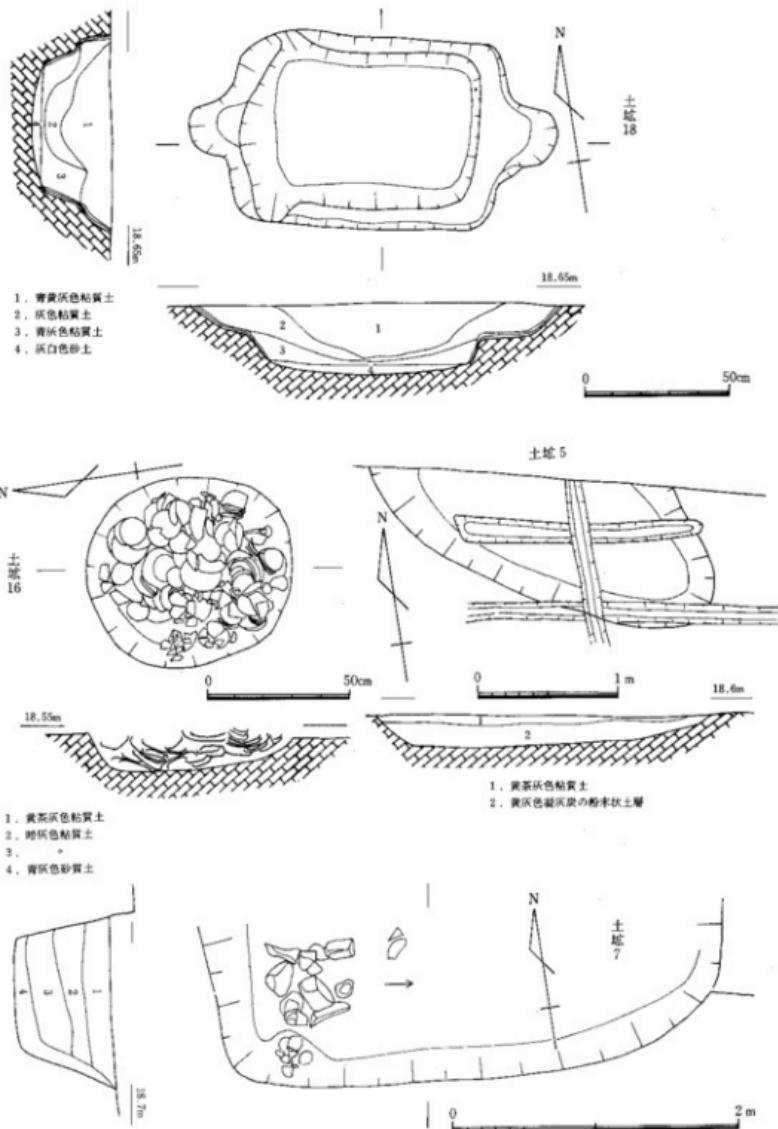


図-20 土塙 5・7・16・18

### 土塙10

2区南西隅に検出した方形の土塙である。全体に5~10cm程度落ち込んでおり、割り浅い落ち込みである。南北4m以上、東西4mを測る。埋土は、茶灰色粘質土である。出土遺物はなく、どのような遺構であるか不明である。西縁から西側へ少しいったところに杭列が見られた。北側部分にもやや小型の同様な土塙が検出された。瓦器や土師器の細片が出土しているが、これもどのような性格のものか不明である。

### 土塙14

4区北東隅にその南側半分だけを検出した土塙である。南北方向に長軸を持ち、復元長径2.3m、短径1.8m、深さ約10cmを測る。掘方形状は舟底状である。出土遺物は、瓦器、土師器の細片が少量出土した。図化しえるものはなかった。

### 土塙15、31

4区北側中央部に検出した土塙である。多量の土師器大小皿が出土した土塙16によって切られている。土塙31が土塙15より新らしい土塙である。土塙15は、南北に長い隅丸方形の土塙で1.0×0.6m、深さ10cm強である。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、瓦等がある。土塙31は、東西に長い土塙で、2.2×0.8m、深さ15cmである。遺物はほとんど出土しなかった。

### 土塙16

2区中央部に検出した土塙である。ほぼ円形を呈し、径60~70cm、深さ15cmを測る。北側は割合急に落ち込むが、南側はゆるやかな傾斜で落ち込む。埋土中多量の遺物が出土した。土師器の大小皿が大部分を占め、その他に鏡と鉄製品が出土した。土師皿は、外側から中心に向かうように渦巻状に連なっている。皿は大小2種類があり、数枚がセットを成してやや斜めにずれながら表向き、裏向き、横向き等さまざまな姿態が見られた。最上層でこれらの状態を数えたら、表32枚、裏14枚、横9枚が認められた。小皿を数枚重ねたものから合口にしたもの、大小皿を重ねたもの等組合せは一定せず各種ある。

### 土塙18

4区中央部に検出した窯状遺構である。南北方向の長軸を持ち、隅丸方形を呈し、南北中央端部に半円形の出張りを付け足した形状である。長径1.3m、短径0.68mである。掘方形状は、南北両側にテラス状の段を有し、2段状に掘られている。東西方向にも同様の段を有するが狭い幅である。形骸化しているところもある。半円形の出張りはテラスから徐々に昇る。底部は中心がやや低い平底に近い形状である。埋土は、上層から、青黄灰色粘質土、灰色粘質土、青灰色粘質土、灰白色砂土である。青黄灰色粘質土と灰色粘質土の中には、多量ではないが焼壁が含まれていた。この窯の側壁であろう、天井部分が存在したかどうかは明確にしがたい。内側の側面は、粘土を張り付けてあり、その粘土は高熱を受け黒茶褐色に変色している。底部にもわずかにその痕跡が認められ、側壁は非常に堅く硬化している。粘土の貼り付けには指に

よった様で荒いなで上げ痕が顯著に見られる。床面下には薄く炭層が堆積していた。その下層には灰白色砂土が底部全体に敷かれていた。湿氣抜きの為か。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、磁器等がある。それぞれ細片で図化しうるものはなかった。南北両端の出張りは煙出しと理解して大過ないと思われる。出土遺物の中には、当土塗によって焼成されたものは認められず、どのようなものを焼いたのか不明である。側壁の中程の位置が一番よく硬化している事を見れば、あまり大きな遺物ではない事だけ確かである。

#### 土塙19

4区中央部に土塙18に切られた状態で検出された。東西方向に長い土塙で、長径1.3m、短径0.7m、深さ約10cmである。埋土は、茶灰色粘質土である。出土遺物は、瓦器、土師器が出土した。図化しえるものはなかった。

#### 土塙20

4区南西隅に検出した土塙である。径0.8m大の不定形の土塙である。深さは10cm弱を測り埋土は黄茶灰色粘質土である。出土遺物は、瓦器、土師器が出土した。この土塙の周辺は、地山が緑黄灰色粘質土である。やや砂粒を含むが、出土遺物中の土師器の素性とよく似ている。この土塙の周辺にも同様の土塙が割合多い。1~5区までの範囲内では一番粘性がある。

#### 土塙25

2区南側に検出した土塙で、南側一部を調査区外へのこしている。ほぼ円形を呈し、径1.0m、深さ12cmを測る。土塙4を切っている。埋土は、上層が黄茶灰色粘質土、下層が茶灰色粘質土である。遺物は、瓦器、土師器、須恵器、磁器、輪羽口、鉄滓と多種類のものが出土した。

#### 土塙31

大溝1の下層から土塙を検出した。大溝の北東隅であり、排水溝を掘削した折に検出したのであるが、その時に削平してしまい消滅した。恐らく径1m未満の規模のものである。出土遺物は割合出土した。瓦器、土師器、須恵器等がある。

#### ピット12

大溝の直ぐ北側で検出した隅丸方形のピットである。一辺34~38cm、深さ約50cmである。埋土は、上層が黒茶色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。下層は水が淀んだ時に出来る埋土であり、掘形形状は方形であり、井戸となる可能性がある。遺物は、瓦器碗と草や小さな自然木が出土した。

## 第2節 遺物

第2次調査において出土した遺物は、コンテナ70箱分である。主に大溝1、2、3から出土し、その他各土塗や小溝からである。また、遺物包含層からも出土したが、調査区は周辺が田畠があり約1.5m程掘り下げた場所にあるため、水が多量に湧き出したり流れ込んだりしたため排水溝を割合広く取った。その結果、排水溝から出土した遺物は遺物包含層から出土した遺物として取り上げたが、大溝や他の遺構等から出土した可能性が高い。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、磁器、木器、繩羽口、鉄滓、瓦等の生活用具である。これらの遺物は、12～14世紀の時期のものである。その他に、埴輪と石器がわずかに出土した。縄文時代、弥生時代、古墳時代のものである。それぞれ遺構を伴わず2次の推積土からである。順次遺構および器種別に説明を加えていきたい。

### 大溝1出土遺物（18～97）

大溝は1区南側から検出した。埋土中から多量の遺物が出土した。土器類について説明を加え、木器については別項で取り扱う。

(18～42)は土師器の小皿である。形態の特徴は様々であるが、全体に広い平らな底部を持ち、器高が低く「偏平」な印象を与える。口縁部をヨコナデし、外反させ、端部を内に折り返すことにより肥厚させる、いわゆる「て」の字型の口縁をもつもの（36、40）、口縁を外反させずに端部を内側に肥厚させるもの（32、41）、口縁部を引きおこすようにヨコナデし、押しナデにより端部が三角、あるいは四角い形態を呈するもの（21、23、24、26、27、28）、口縁をヨコナデし、端部が外反気味に終るもの（18、25、31、33、34、37、38、42）、端部をそのまま終らせるもの（19、20、22、29、30、35）がある。（29、31、35、39）はたち上がりに角がつくように口縁部をつまみ上げている。（39）は、口縁のヨコナデを2段ナデ調整している。手法はいずれも口縁内外面をヨコナデし、外面底部の指押えを明瞭に遺すものは少ない。（23）は、内面見込みをヌキナデしているが、他のものはすべて一方向のナデを施す。（23、38、41）は灯明皿として使用していたと思われる。口縁端部に黒褐色のすす付着痕が見られる。（22、30、38、41）は2次焼成を受けたと思われる。白茶褐色から淡茶褐色を呈するもの（21、23、28、31、33、34、37、39、41）で、胎土は密なものからやや粗いものも見られるが雲母を含んでいるものが多い。（30）は淡灰褐色を呈し雲母を多く含む。（20、22、26、35、36）は淡赤褐色を呈し、胎土はやや粗くクサク礫を含むものがある。（18、27、40）は淡黄褐色、（19、29）は淡緑灰色を呈し、砂粒、雲母をわずかに含むものが多い。

(43～54)は、法量の大きいものである。（47、48、51、53）は口縁端部を押しナデしてい

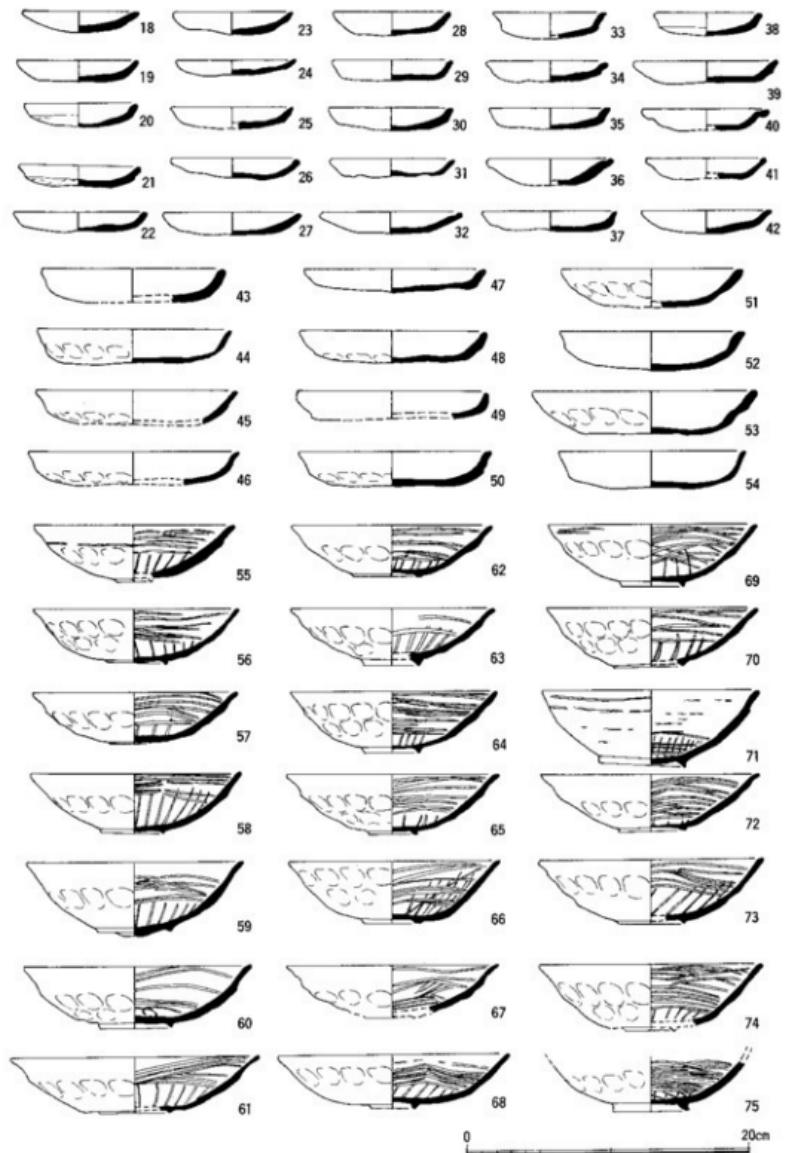


図-21 大溝1出土遺物その1

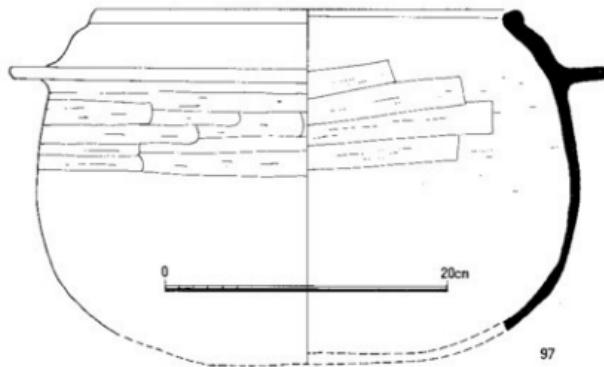
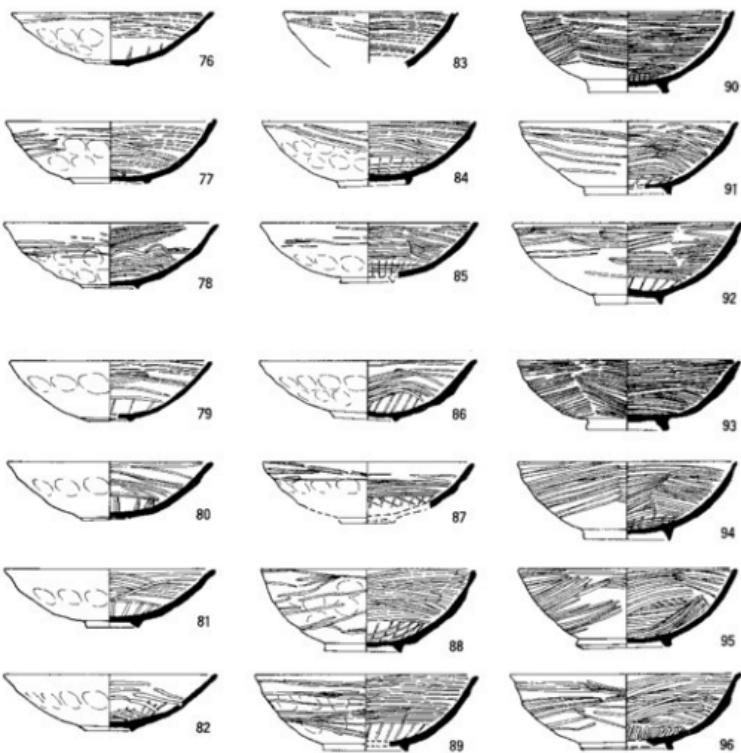


図-22 大溝1出土遺物その2

る。(44、46)は内面に工具痕が残存している。(47)の内面はハケ調整をとどめている。(51)の内面も板状のものでナデ上げた痕が遺る。(43、48、49、50、54)はヨコナデを2周させたと思われる。(53)の内面見込みスキナデ。(44、47、48、49、51、53)は灯明皿として使用した痕跡がある。(50、54)は淡赤褐色で微小砂粒を含んでいる。(45、48、49)は淡茶褐色を呈し、雲母を含む。(44、46、47、51、53)は白褐色で微小砂粒を多く含む。(52)は淡緑灰色、雲母、クサリ蹕を含む。

(55~96)は瓦器碗。見込みの暗文を疎に施こすもの(55~59、61~65、68、69、72~74、78、79、81、86、89)が圧倒的に多い。時期も13世紀代に含まれると考えられるものが多い。「和泉型」の特徴をもつ瓦器碗が多い中で、(83、90、93)は生産地を異にする特徴をもつ。(83)は上層よりの出土であるが、口縁端部内面に沈線がまわり、内外面のヘラミガキは非常に細く、胎土は砂粒をほとんど含まず堅密な焼き上がりとなっている。(90)は、内弯気味に立ち上がる体部を持ち、口縁は直立気味である。高台も外ふんぱり気味に高く付けている。口径14.8cm、器高5.8cmを測り、胎土は密で漆黒色を呈している。外面のヘラミガキは、四分割に折り返してジグザクに磨いている。口縁内面には深い沈線がめぐり、見込みに一反復を一単位とする細かい格子状の暗文を施こしている。体部のヘラミガキも非常に細かくすき間もみられない程度にみがいている。(93)は、最下層からの出土である。体部外面を折り返してジグザクで四分割に丁寧に高台付近までみがいている。口縁内面に浅い沈線をめぐらせ、見込みに連結輪状の暗文を施こしている。体部のヘラミガキは、非常に丁寧にすきまなくみがいている。口径15.4cm、器高5.0cmを測り、高台は大きく、外ふんぱりに大きく付けている。外面重ね焼きのために体部外面下半は白灰色を呈しており、焼成はやや甘い仕上がりとなっている。(90、93)は、他地域からの搬入品であり、古い様相を帯びるものである。(88、89、94~96)も(93)と同じ出土地点である。いずれも太い原体で荒くヘラミガキしている。(95)は内面全体をヘラミガキしており、暗文は認められない。(96)も見込みを平行に磨いているが、暗文を意識しているとは思えない磨き方である。内面の調整からみると、内面見込みのヘラミガキが文様として分化する以前のものとしてとらえることも可能であるが、形態的には同じ出土地点からの(88、89、94)と大きな隔たりがあるとは考えられず、同時期のものと考えられる。この事は、12世紀後半期において、ある程度11世紀後半から12世紀前半期にかけての特徴である手法を共存させていたと考えられるかもしれない。最下層より出土のもの(80、81、82、86)は13世紀に含まれると思われるが、(88、89、93~96)は12世紀に含まれると思われる。

(97)は土釜である。器高は25.1cm、口径29.6cmを測る。色調は、黄茶灰色を呈し、胎土は石英、長石の砂粒を多く含む。口縁部は内弯した後短く「く」の字形に外反する河内産の羽釜である。体部外面には短く水平に伸びた鋸部径42.5cm、出3.2cmの鋸が1周する。調整は、外面鋸より下へと内面上半部に水平方向のヘラ削りを施す。内外面下半とナデ調整である。

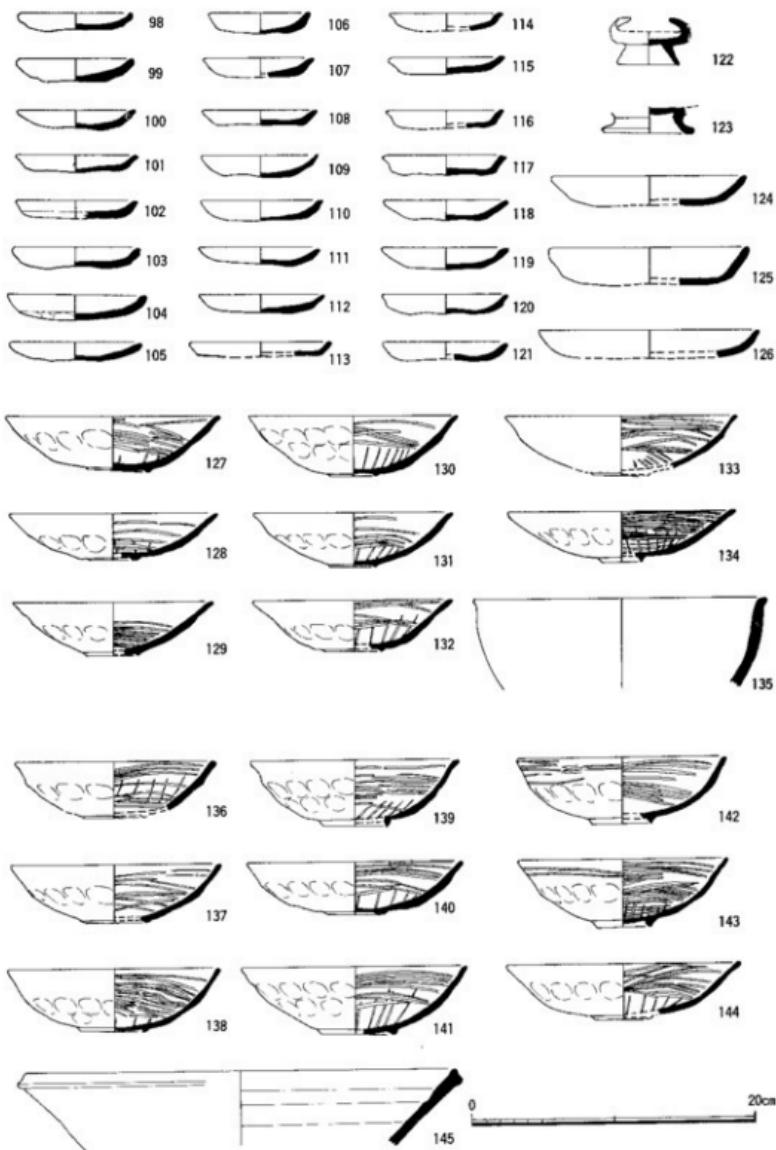


図-23 大溝2出土遺物

## 大溝2出土遺物

大溝は3区中央部で検出した。ほぼ南北方向に走り、埋土中から多量な遺物が出土した。遺物の取り上げは、主に上下層に分けて取り上げた。上層より出土した遺物は、(98~113、112、123、111、112、127、135、142、143、145)である。他のものは下層から出土した。土師質小皿は、大溝1の出土遺物と同様器高が低く偏平なものが多い。また、形態的な種類は大溝1より弱干少ない。(98、99、103、105、109、111、121)は押しナデにより口縁端部が三角形を呈し内傾している。(100)は、焼成前に2ヶ所並ぶように側面穿孔している。(124~126)は大皿である。いずれも広い平底の底部よりゆるやかに内湾し立ち上がる体部を持つ。(125)は、口縁端部押しナデしている。(103、109、111)は、内面底部ヌキナデ。(110、111、121)は、口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用していたと思われる。(111、113、115~118、120、124)は、白灰色を呈し微小砂粒と雲母を含む。(98、102、105~107)は淡赤褐色で、胎土は粗でクサリ穢、雲母を含む。(99~101、103、108、110、114、119、121)は茶褐色を呈し、胎土は密、雲母を含み焼成は良好である。(109)は、白黄灰色でクサリ穢をわずかに含んでいる。

(127~134、136~144)は瓦器椀。ほとんどのものが13世紀に含まれるものと思われる。外面のヘラミガキは施こされなくなり、高台が小さくなっている。(142、143)は13世紀の前半に含まれるものと思われる。いずれも灰黒色を呈し、微小砂粒を含むが密で焼成は良好である。(135)は鉢。口縁端部を外反させている。

(145)は東播系の捏鉢。口縁部を斜めに切り、やや幅広くつくっている。内外面は弱い回転ナデが見られる灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含むが堅激な焼き上がりである。

(146)は墨書き器である。瓦器椀の外面口縁部付近に逆L字形の墨書きである。斜方向に約2cm、横方向に1cmを測る。瓦器椀は、復元困難であるが、外面にミガキがなく、内面にも雑で簡素な暗文がみられるところから出土遺物中でも新らしいものである。色調は灰白色を呈し、胎土にわずかな砂粒を含む。

## 大溝3出土遺物

大溝3は5区中央部で検出した。ほぼ南北方向に走り、幅5.2mの一番大きな溝である。埋土中から多量の遺物が出土した。遺物の取り上げは、上下層に分けて取り上げた。上層より出土した遺物は、(147~153、155~163、165、166)である。下層遺物は、(154、164)である。(154)のみが下層より出土の土師小皿。(147~151、153)口縁端部押しナデしてい

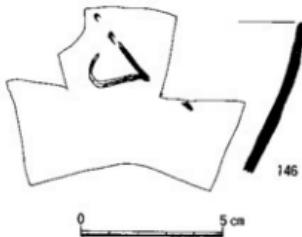


図-24 墨書き土器

る。(148)は口縁二段ナデ調整している。(149)の底部に板オサエらしき痕があり、(152)にも一部残存する。(147、148、150～153)は淡茶褐色を呈し、雲母を含む。(154)は淡赤褐色でクサリ礫を含む。(149)は淡緑茶褐色で雲母を含む。(155)は白褐色を呈し、微小砂粒、クサリ礫、雲母を含む。

(156～164)の瓦器椀は、いずれも13世紀に含まれるものと思われるが、(164)は高台付近のみの残存であるが、高台は比較的しっかりしており、外面のヘラミガキも太く不明瞭ではあるが、高台付近まで磨いており、内面見込みの暗文は、斜格子に平行線を加えて、連続した三角形をつくっている。他のものより時期が下る可能性が強い。いずれも黒灰色を呈し、胎土は微小砂粒を含み、焼成は良好である。(165)は陶器。一部タタキを残すが、外面を板状のものでナデ上げている。白灰色を呈し、胎土は密、焼成は堅緻である。(166)は砥石。乳黄褐色を呈し、片面に使用時の線刻が認められる。仕上げ用であろう。この他に石鍋と思われる破片も出土している。

大溝1、2、3出土の遺物構成は、瓦器椀、同小皿、土師質大皿、小皿、土師器土釜、東播

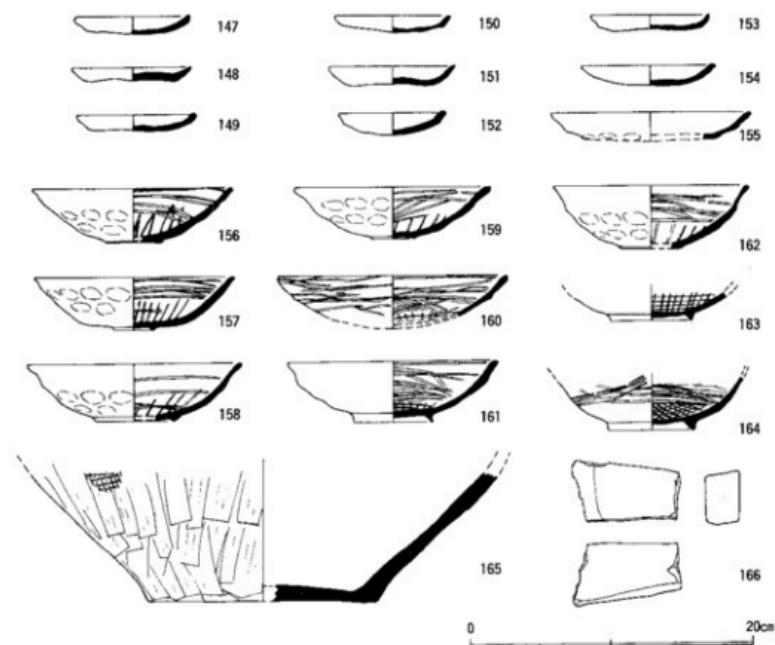


図-25 大溝3出土遺物

系捏鉢、須恵器、陶器、中国製磁器に限られ、瓦器椀、小皿、土師質大皿・小皿がほとんどを占めており、その他のものは少量である。非常に単純な器種構成から成り立っている。

### 土塙7

土塙7は、2区北側隅に検出した土塙で、埋土は、大溝1、2、3と同様であり、類似した遺構の性格を持つ。出土遺物は、瓦器、土師器、須恵器、磁器、木器等がある。出土層位下層遺物は、(171、175、176、178~180、182、189)である。

土師器小皿(167~180)は、径6.5~10.2cmを測り、円弧状の形態のもの(170、172、176)、平底で屈曲して立ち上がるるもの(167、169、171、174、175)、短く立ち上がり外反する口縁を持つもの(177、179)等がある。いずれも端部は丸く仕上げる。色調は、灰白色、灰茶色、黄灰色を呈し、ほとんどのものが雲母を含む。土師器大皿(182)は、口径14.5cm、口縁外面をヨコナデし外反気味に立ち上がる。

瓦器小皿(181)は、土師器小皿と同様の形態のもので、内底面に平行のミガキを施こし、口縁外面に2段のヨコナデを行う。瓦器椀は、外面にミガキを施こすもの(185~187)と施こさないもの(183、184)がある。前者は、内面に荒い斜格子及び斜方向の暗文を施す。後者は、割に密なミガキ、見込みは格子とジグザグ状に施す。形態的には、前者は口径が大きく、口縁は内湾気味に立ち上がり、後者は、外上方へ直ぐ伸びるか外反気味に立ち上がる。

須恵器は、壺口縁2片(188、189)がある。(188)は、口径9.5cm。体部を欠損するが、頸部は直立し、口縁端部で短く立ち上がり外反させ、上端に平坦面をつくりナデしている。頸

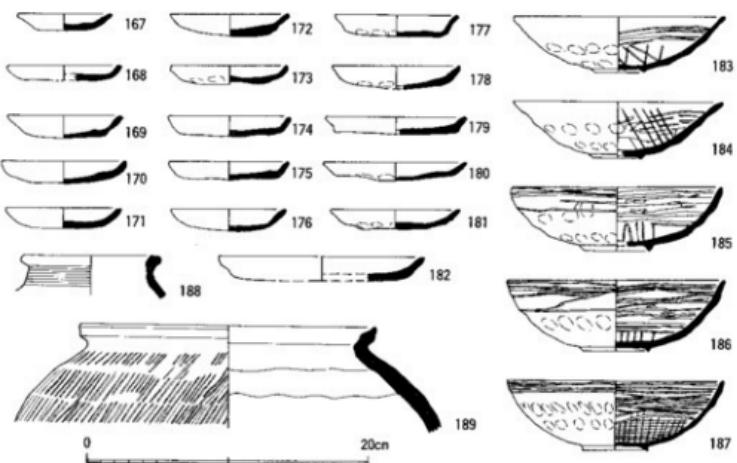


図-26 土塙7出土遺物

部外面はカキ目を施す。 (189) は、口径20.7cm。頸部がほとんどなく、体部から口縁にかけて大きく外反させた後内湾気味に直立させる。体部外面は、斜方向の平行タタキを施し、部分的にナデ調整を施すことによって凹凸をなくしている。内面は粘土紐が顯著に遺る。胎土はやや砂粒を含み、色調は青灰色。仕上げは全体に雑な感じである。

#### 土塙16

土塙16は4区北側中央部で検出した。150点以上を数える土師皿が出土した。一括遺物であり、すべて完形品のまま納置されたものと思われる。その他に硯1点と釘であろうと思われる鉄製品が少量出土している。瓦器塊の出土は1点も検出されなかった。土師質皿は、法量により大、小の2種類に大別した。いずれも、胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。

#### 土師質小皿 (190~303)

椭円形を呈するものや不整形のものがみられる。口径9.0~10.5cmの範囲にあり、9.7~10.1cmの間に圧倒的に集中する。器高は1.5~2.0cmまでであるが、他の造構の小皿に比べると、わずかに大きい。調整はいずれも、外面底部に軽いユビオサエをとどめ、口縁内外面ヨコナデし、内面見込みは一方向のナデを施している。ここではヌキナデは見られない。(190~202、210~222、230~242、249~261) は、外面のユビオサエも弱く、底部よりゆるやかに立ち上がり口縁部に至る。口縁部外面のヨコナデも弱い。器壁は厚いものが多い。(190~198、210~218、230~238、249~257) は、白橙色~淡赤褐色を呈し、微小砂粒、クサリ礫、雲母を含んでいる。(199~202、219~222、239~242、258~261) は乳茶褐色を呈している。(202、222) はその中でも特にクサリ礫を多く含むものである。

(203~209、223~229、243~238、262~267) は、口縁端部がやや外反気味に終るものである。(203、204、223、224、243、244、262、263) は口縁部外面のヨコナデが前者のものより強く、口縁部を引き上げるようにヨコナデしている。前者は未調整の部分とヨコナデの部分が不明瞭なものが多いが、こちらは明瞭なものが多い。(203~207、223~227、243~237、262~267) は、白橙~淡赤褐色。(208、228、248、267) は、乳茶褐色。(209、229) は、その中でもクサリ礫を多く含むものである。(268~303) は、口縁端部が外反気味に終るものである。数量的にみると、白橙色~淡赤褐色を呈するものが一番多く、また、前者のタイプに多く見られる。一方、後者のタイプに乳茶褐色のものが多く見られる。

#### 土師質大皿 (304~332)

法量は、口径が14.5~15.8cmの間にあり、15.0~15.5cmの間に最も集中している。器高は、2.5~3.5cmまでであるが、3.0cm前後のものが多い。形態的に明らかに2つのタイプに分ける事ができる。1つは、乳茶褐色を呈し、平坦な広い底部より上方にゆるやかに立ち上がり口縁部に至る。口縁部外面のヨコナデは、すべて2段ナデ調整である。端部は押しナデせずにそのまま丸く、あるいは四角い形態となって終っている。外面に軽いユビオサエが残る。胎土は、

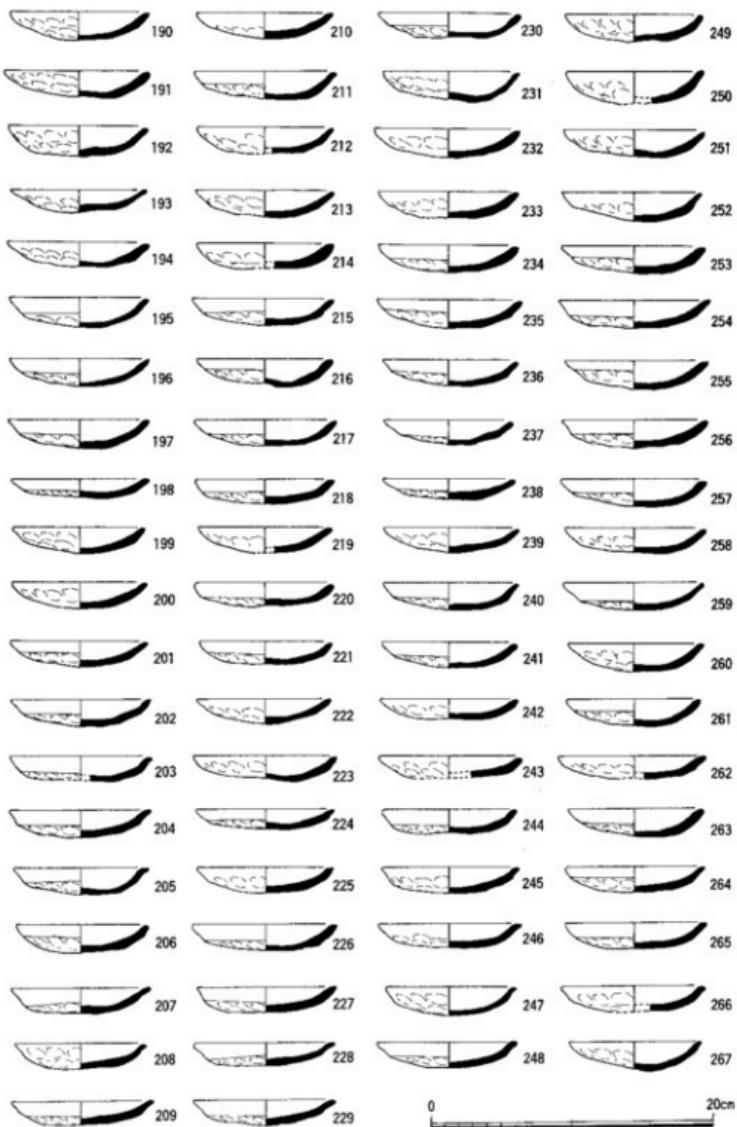


図-27 土塙16出土遺物その2

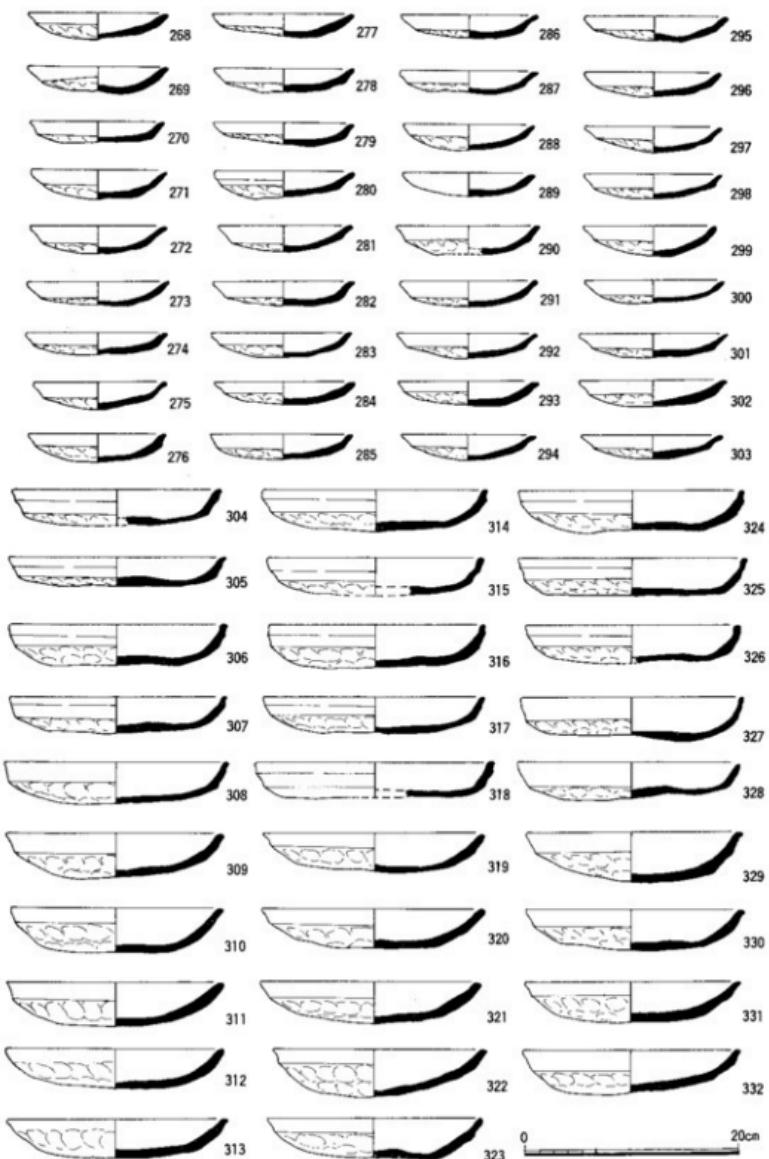
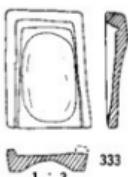


図-28 土私16出土遺物その1

粒子は密であるが微小砂粒を多く含む（304～308、314～318、324～328）。（305、324）の外面部には板状圧痕が認められる。2つ目は、（309～313、319～323、329～332）で、底部より内弯気味に立ちあがり、口縁部のヨコナデは一段ナデ調整である。外面のヨコナデ、ユビオサエは弱い。白橙色～白褐色を呈するものが多い。胎土は、微小砂粒を多く含む。クサリ穂、雲母も少量含む。このタイプには、底部の板状圧痕は認められない。

これらの2つのタイプの大皿には、数量的、法量的な差異は認められない。大皿、小皿の2種類を合わせて、明らかに灯明皿として使用されたと思われるは、（249、254、305）の3点のみである。大皿においても小皿においても、色調等の差異はあるにしても、時間的、地域的な隔りはあまりないものと思われる。土師皿の一括出土という事により、祭祀に関連のあるものであるかもしれない。

#### 硯



暗灰黒色を呈し、材質は粘板岩。海部にわずかに墨が残る。陸部は途中できれいに割れている。断面からみると、意識的な切断に思われるが、何らかの原因で割れてしまったもの、あるいは割られたものを再利用していたものと思われる。また、裏面も凹状に深く削っている。

長さ8.4cm、幅6.0cm、厚さ0.8～1.6cmである。

図-29 砚

#### 各土塗出土遺物

土塗中出土した遺物を一括にして説明を加えたい。土塗は、1、2、3、4、5、15、17、18、19、25、27、31である。

土師質小皿は、各土塗まんべんなく出土した。土塗1では、口縁端部が外反するもの（335）と内弯気味に直立するもの（336）がある。土塗2は、すべて内弯気味に直立するが、軽くヨコナデしたもの（339、340）と強くヨコナデして底部との境に段を有するもの（337、338）、2段のヨコナデを行うもの（341）がある。淡茶褐色（337、339）、白褐色（338）、白黄褐色（340、341）。（340）は一部煤付着し灯明皿と使用されたものと思われる。土塗4（342）は、口径9.9cmと中規模のもので、外面に軽く2段のヨコナデが成される。土塗5（344）は灰褐色で口縁部は外反する。（315）は土塗7、（346～347）は土塗11。（347）にはクサリ穂が多く含まれ灰黄色を呈する。（348）は土塗15、（349～351）は土塗17、（352、353）は土塗19、（354～356）は土塗25、（357～362）は土塗31である。土塗31出土のものは全部内側へ折り込む口縁部をもつ。口径8.0～10.0cmを測り、色調は黄灰色及び灰褐色を呈する。胎土は、精良な粘土の中でクサリ穂を含むもの（258、259、260）と雲母を含むもの（361）に分かれ、白色及び黑色微砂粒を多く含むもの（257、362）とがある。

土師器大皿は、細片が多く固化したのは少なかった。土塗4出土のもの（364）は、口縁

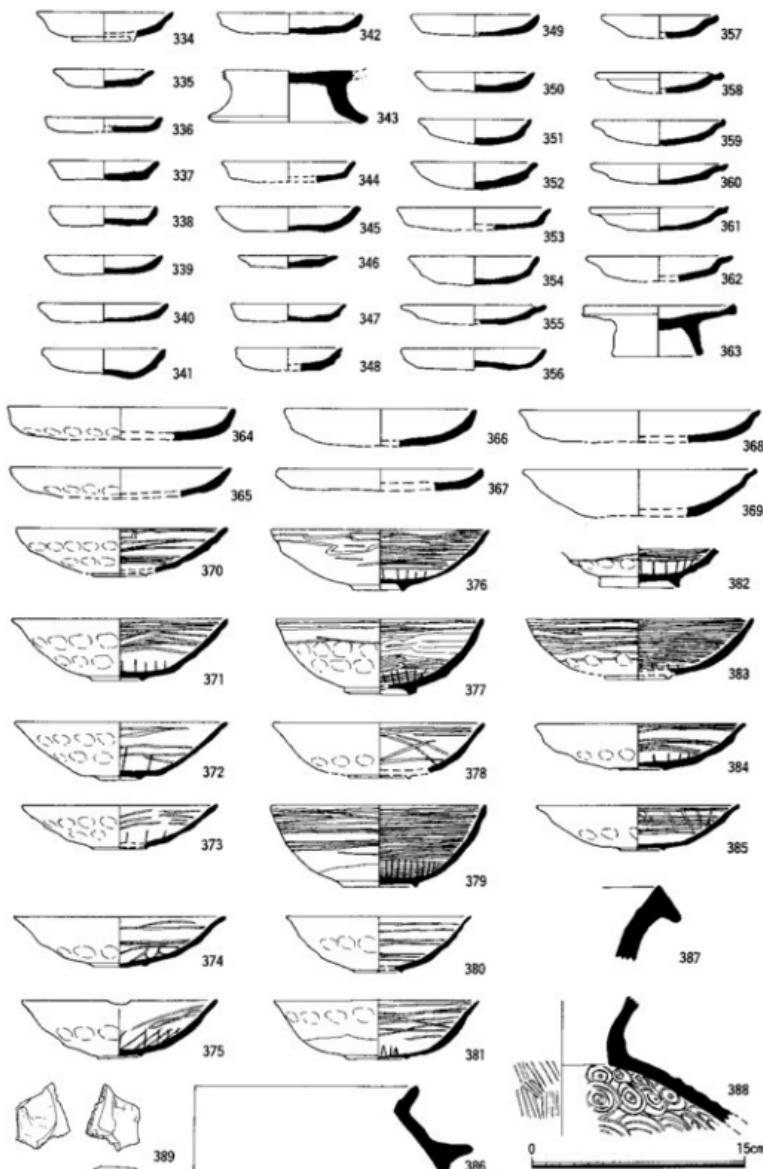


図-30 土塙1・2・4・11・15・17・19・25 出土遺物

部外面に軽い1段のナデを施す。(342)と同じ調整方法である。土埴15、17出土のもの(365、366)は、口縁部はヨコナデをし外側上方へ真直ぐ伸びる。(365)は灯明皿である。土埴18出土のもの(367)は、偏平なもので、平らな底部から短く内弯気味に立ちあがる口縁を持つ。土埴25出土のもの(368)は、口縁部が外反する。土埴31出土のもの(369)は、器高が高く、外反した後内側に屈曲するものである。色調は、灰白色を呈し、胎土は、白色、黒色微砂粒を少し含む。(363)は、台付小皿で土埴31出土である。皿と台部には接合痕を遺すが、全体に丁寧なつくりである。胎土はやや砂粒を含み、黄灰色を呈する。高杯の脚部(343)は、土埴4出土である。雲母を含み、雑な仕上げである。上面に2次焼成の煤が付着する。

瓦器小皿(334)は、外面ヨコナデしや外反気味である。外面にはヘラミガキを施す。瓦器碗は、土埴1出土のもの(370、371)は、外面にミガキを施さず、内面も荒いミガキ方である。土埴2出土のもの(372)は、さらに内面ミガキが簡素になり、内底面に平行の暗文を施す。土埴3出土のもの(373、375)は、雑なミガキで、内底面に平行、ラセン、斜格子の暗文を施し、高台も雑なつくりである。(375)は、口縁端部が片口に押え込んでいる。土埴4出土のもの(376、377)は、逆台形ないし外側へ張る高台が付き、内面は密なヘラミガキを施し、外面は上半部のみヘラミガキを行なう。土埴5出土のものは、外面にミガキ調整を行なわないもの(378)と行なうもの(379)がある。土埴17、19出土のもの(380、381)は、外面に明瞭な粘土雜目がある。(381)は、内底面にジクザクの暗文を施す。土埴25出土のもの(382、383)は、外面の暗文が高台近くまでのこるものである。土埴27、31出土のもの(384、385)は、外面にはミガキが見られない。

(386)は土師質土釜である。河内産の羽釜である。須恵器は、口縁端部が斜下方へ屈曲するもの(387)と頸部から肩部にかけての破片(388)である。前者が土埴31、後者土埴1。

(389)は、サヌカイト石器で、土埴15から出土した。色調は乳白色を呈し、薄い剥片に歯を付けている。縄文時代後期のものであろうか。

#### ピット出土遺物

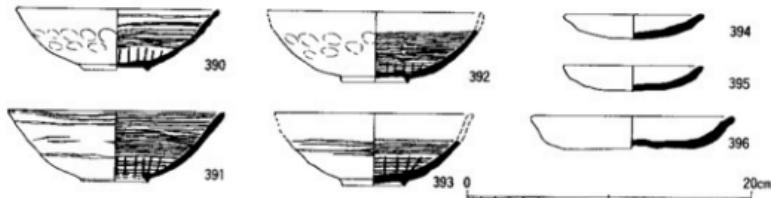


図-31 ピット出土遺物

ピットは、多数出土したが、遺物はあまり含まない。出土しても細片が多く図化したものは少數であった。ピットからの出土遺物は、瓦器碗（390～392）が3点ある。外面にわずかにミガキを施こすもの（391）と施こさないものである。（391、392）は、内面を密にヘラミガキする。内底面には格子状の暗文を施こす。ピット14から出土したもの（393）も（391）に類似する。ピット97から土師質小皿が出土した。口縁部外面を軽いヨコナデを加え、下半は指押えをする。色調、灰黄色、胎土は微小砂粒を含む。ピット36より土師質大皿（396）が出土した。わずかに外反する口縁を持つ。

#### 遺物包含層出土遺物

第2次調査を開始する折、条里上層部分の土層を掘削した後、湧水が激しい為排水溝を掘った。この時に多量の遺物が出土した。条里下層遺構の上層にも遺物包含層が約10cm見られたが、この土層から出土したものは、細片が多く図化しえるものはなかった。これらの遺物は、主に大溝1、2、3等の遺構から出土した可能性が強いが、地区設定後で地点は明らかにする事が出来るが層位不明のため、遺物包含層出土遺物として報告したい。

器種構成は、以上述べた各遺構出土遺物と同じである。土師質大小皿、瓦質小皿、碗、東播形捏鉢、河内産の土釜等である。

1区包含層から出土した遺物（図-32）、土師質小皿（397～407）は、口縁部に軽いヨコナデを行ない、底部から口縁部まで段を成さないもの（397～401）、強いヨコナデを行ない段を有するもの（402～404）、口縁端部を内側に屈曲させたもの（405～407）がある。色調は、茶褐色、淡緑灰色、白褐色、赤褐色の雲母を含むものと明茶褐色、白赤褐色のクサリ礫を含むもの（402、405、406）がある。土師質大皿には、口縁部を外反させたもの（411）が少なく、軽くヨコナデしたものが多い。色調、胎土については、小皿と何ら変化は認められない。瓦質小皿（412～417）は、口縁外面を割合強くヨコナデする形態で、ミガキの行わないもの（412）から平行の暗文を内底面に施すもの（416、417）まであり、ミガキがやや密なものが器壁が厚く、器高もやや高い。瓦器碗（418～429）は、大溝1出土遺物と同じ形態のもので、時期的により新らしいものや古いものは見当らない。（430）は、須恵質の捏鉢である。恐らく片口になると思われる。色調は灰色、胎土は密で堅緻である。（431）は須恵質鉢の底部である。糸切り痕を明瞭にのこす。（432）は、須恵質鉢の口縁部である。（430）と違い口縁端部を外方に尖らせる。（433、434）は、土師質土釜である。（433）は口縁外面にヘラ削り痕が斜方向に連続してのこる。体部内面は平滑に板ナデを行なう。（434）は、内外面ヘラ削りを横方向に行なう。両者とも、胎土は石英、長石等の砂粒を多く含み、色調は灰褐色を呈する。鉢の下部には煤が付着する。

2～5区包含層からも多数の遺物が出土した。3、5区が特に多い。これは、大溝2、3がある事から、これらの溝の埋土中から出土した事を示す。土師質大小皿（435～442）、瓦質小

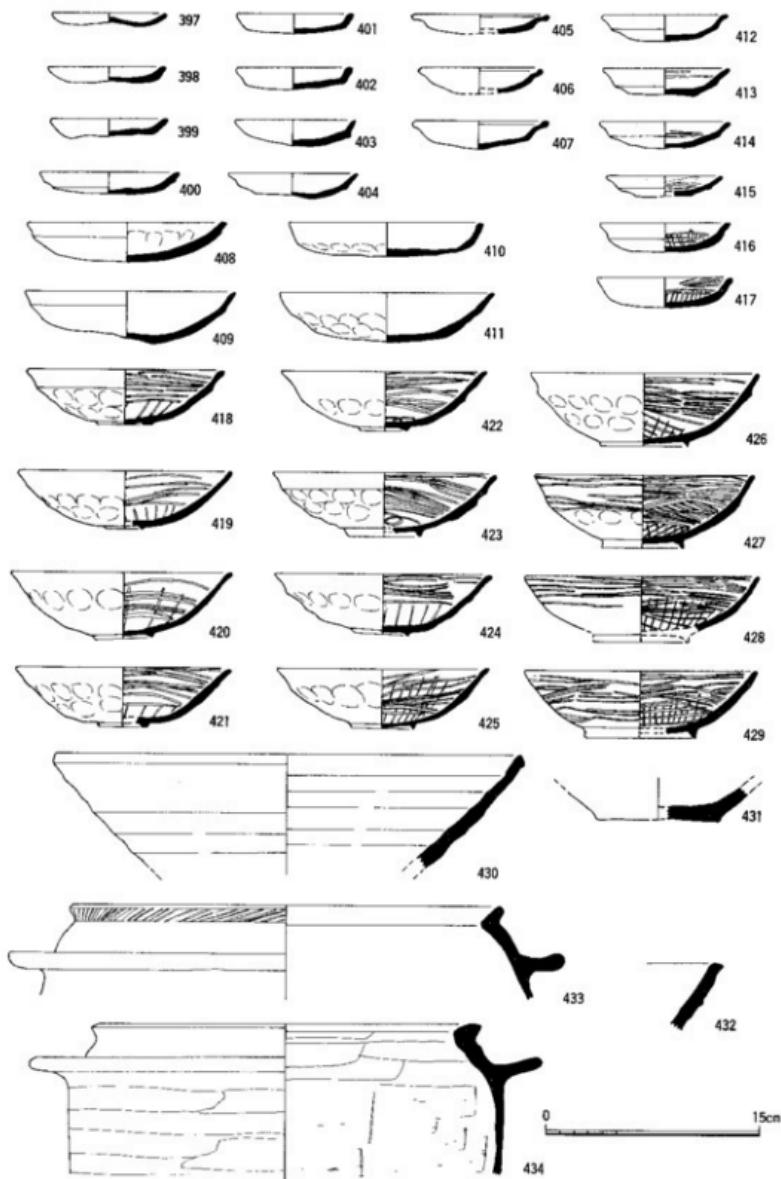


図-32 包含層出土遺物その1

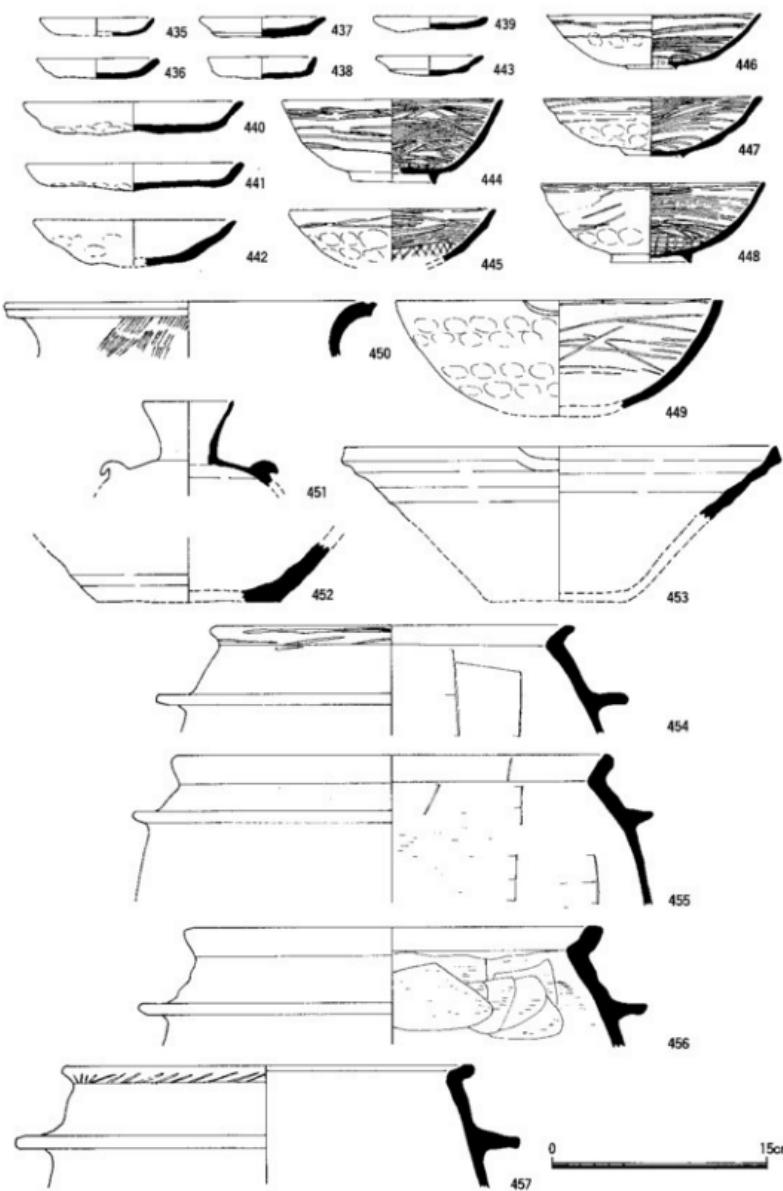


図-33 包含層出土遺物その2

皿(443)、瓦器碗(444~448)は、大溝2、3と同類の遺物であり、形態や調整に変化は認められない。(449)は、瓦質の鉢である。恐らく片口になるものと思われる。外面は指押え、内面は疊なヘラミガキである。(450~453)は須恵器。(454~457)は土師質の土釜である。第2次調査において出土した土釜は、ほとんど同一形態のものであるが、数片にすぎないが、器壁が薄く内弯する口縁部を持ち、端部は折り返して2重にしている土釜がある。胎土は精良な粘土を使用し、色調は灰褐色を呈する。大和地方のものか。

#### 磁器

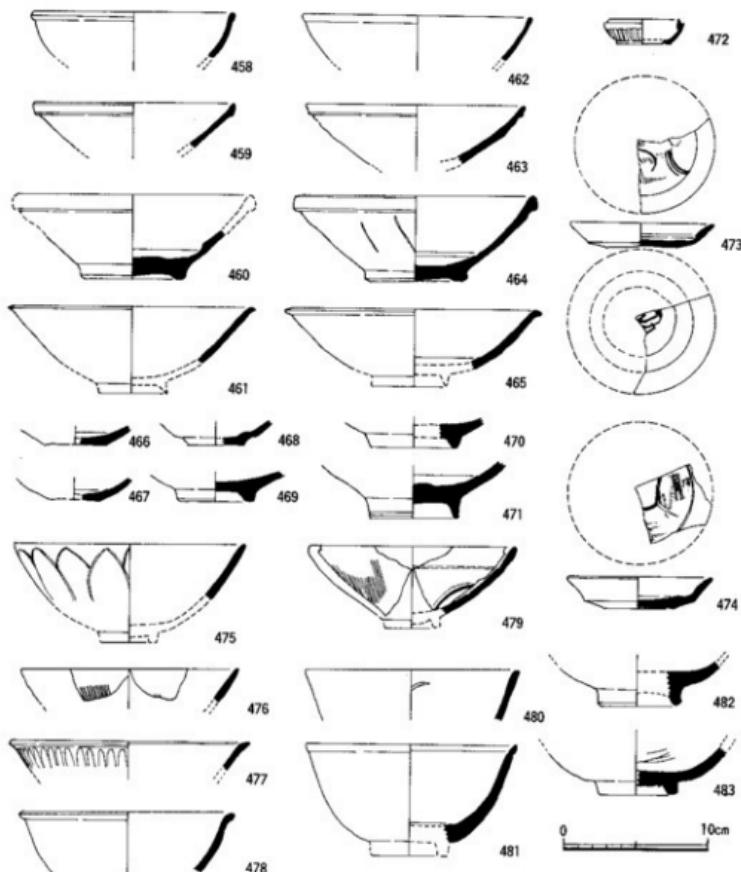


図-34 磁器

少量であるが輸入陶磁器の出土があった。(458~471)は白磁、(472~483)は青磁である。全体的に白磁の出土点数の方が多い。

#### 白磁 (458~472)

(458~460、462~464)は、玉縁状口縁をなすもの。(458、462)の玉縁は小さく、体部も内窓気味に立ちあがる。(458)には、内外面共に細い貫入がみられる。白褐色の胎土に、白黄褐色の釉がかかる。(462)も(458)と同様に器壁が薄い。淡灰褐色の胎土に、淡褐色と白色の釉がまだにかかっている。(459、460、463、464)は、体部が外方へ大きく開くもの。中でも(464)は玉縁も大きく器壁も厚い。(460)も口縁部付近が欠損しているが、(464)と同様のタイプと思われる。(459、460、464)は、白色の胎土に濁白褐色の釉がかかる。(463)は釉の色がやや灰色をおびている。内面の見込みに沈線がめぐる(460、463、464)。(461、465)は端反りの口縁をもつ。いずれも高台を欠しているが、(471)のタイプの高台に統くと思われる。(461)の口縁端部は、薄くシャープな印象をうける。体部は外方に立ちあがるものであろう。(465)は(461)よりやや平らな体部をもつと思われる。白色の胎土に濁白褐色の釉がかかり、内面口縁付近に見込みに沈線がめぐる(465)。(466~477)は底部あるいは高台付近のみの残存である。(466~46、470、471)は、いずれも見込みに沈線がめぐる。(470)は、見込みを環状に釉をかき取っていり。(471)の断面には、大きな気泡がみられ作りは丁寧なものとは言えない品である。(472)は合子の身。外面に陽刻の蓮弁文をもつ。口縁端部は非常に薄くシャープである。外面底部露胎口縁は口はげ。淡灰色を呈し、釉はやや青味をおびたものである。

#### 青磁 (475~483)

(475、479)は、外面に削り出しによる蓮花文をもつ碗。龍泉窯系。(475)は、淡灰色の胎土に濁綠灰色の釉をかけている。幅の広い蓮弁である、(479)の釉は淡い灰褐色をおびてある。体部外面にクシ書き文が見られ、内面に沈線とクシとヘラによる模様が残る。(476、477)は、同安窯系のものと思われる。(476)は、白色の胎土に淡青灰色の釉がかかる。外面体部にクシ状工具による文様をもつ。内面にも、クシとヘラによる文様がみられる。(477)も外面にクシ状の文様の一部が残存する。内面にもわずかにクシ状の文様の一部が残存する。白色の胎土に暗緑色の釉がかかる。(478~483)は、いずれも龍泉窯系の碗部あるいは高台部である。(478)は、青灰色の胎土に淡青灰色の釉がかかり、口縁端部は外反している。(480)は、白色の胎土に暗緑色の釉。口縁端部は丸くおさめる。内面に割花文かと思われる文様の一部残存する。(481)は、白茶褐色の胎土に茶褐色の釉。口縁内面付近に沈線がめぐる。(482)は、白色の胎土に淡青緑色の釉。内面に目痕らしきものが残る。大きく貫入が入る。(483)も白色の胎土に暗緑色の釉がかかる。内面に割花文らしき文様残存し、見込みに目痕有り。(473、474)は、同安窯系の皿。(473)は、淡褐色の胎土に淡青褐色の釉を施す。

内面にクシとヘラによる文様が認められる。外面底部は露胎で、糸切りの痕が見られる。また、墨書きしきものが残存するが判読出来ない。(474)も同様の皿、白灰色の胎土に淡い暗緑色の釉をかけている。

これらの磁器の出土地点は、(458、466、473、475、480) 大溝3上層、(45、460、469)は2区包含層、(461)は土広8、(462、468)は5区包含層、(463)大溝1A区下層、(464、477、478、483)は1区包含層、(465)は大溝1D区、(467)は大溝3下層、(470、479)は大溝2上層、(471)は大溝1B区上層、(472、474、476)は4区包含層、(481)は大溝2下層、(482)は3区包含層である。

#### 木製品

木製品は、大溝1、2、3、土広4、7、ピット62、2区包含層から多数出土した。特に大溝出土の遺物は遺存状態が良好であった。これは、大溝の埋土は、永く水が淀んだ時の堆積土であった理由からであろう。今回報告する木器類の他に、松、竹等自然木も多數を数える。コントナ箱6箱分出土した。以下、遺構別に梗概を述べたい。

#### 大溝1出土木器

1区南側の東西方向の大溝1から出土したものである。大溝の検出面積は約20m<sup>2</sup>弱である。(484、485)は、小さな杭状木器である。丸棒の先端を削り、他方をきれいに切断する。さらにその角を少し削り落している。長さは、10.6、14.5cm、棒径、2.5、1.2cm。(486)は長方形の薄い板材で、一端は欠損している。両側には対称しない縫穴が計3ヶ所見られる。1つの縫穴には棒皮紐が残存している。横幅4.0cm、厚さ0.4cm、現存長12.4cm。(487)は、刀子形状を成し、鋒は欠損して不明であるが、フクラの付くものであろう。区は片区で茎の先端を欠いている。棟は角棟の両端を台形に削り落している。しかし、刀部の削りが成されておらず、作製中に何らかの事故により排棄された未製品である。刃部に1穴がある。幅3.1cm、茎の幅1.4cm、厚さ1.1cm、復元刃長15.4cm。(488)は、隅丸方形の曲物の底板となるものか。木口部分を弧形に削りを施す。横幅5.0cm、厚さ1.2cm、現存長17.2cm。板目材である。(489)は、方形の板材で、4隅の一角だけを有する端材。角より5.6cmのところに縫穴が1穴ある。端部は台形状に削り落とす。板目材。幅5.2cm、厚さ0.8cm、現存長14.3cm。(490)は、曲物の側板材か。一方の面には約1cm位の間隔で板の厚さ中程まで刻みを入れる。恐らくこの刻みは、内弯させるためのものである。厚さ0.8cm。(491)は、木球である。丸木の両端を短く切り、その両端を削り球形に仕上げる。削りは細かく行ない削り面はあまり見当らない。中央部は加工せず自然面をそのままのこす。径3.8~5.6cm、長さ4.3cm。(492)は、一端が折損している用途不明木器である。遺存隅の一端は、角のままで、他端は、丸く削る。幅7.6cm、厚さ0.5cm、現存長4.3cm。(493)は、端部を乳頭状に削りを施す、他端は焼失して不明の棒状木器。径3.0cm。

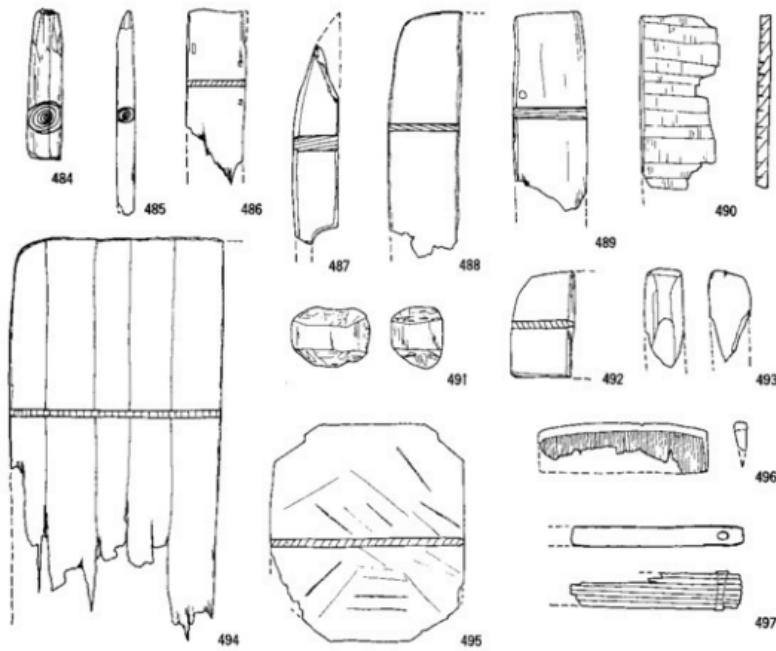


図-35 木製品(484~497)溝1、(498~509)溝2 その1

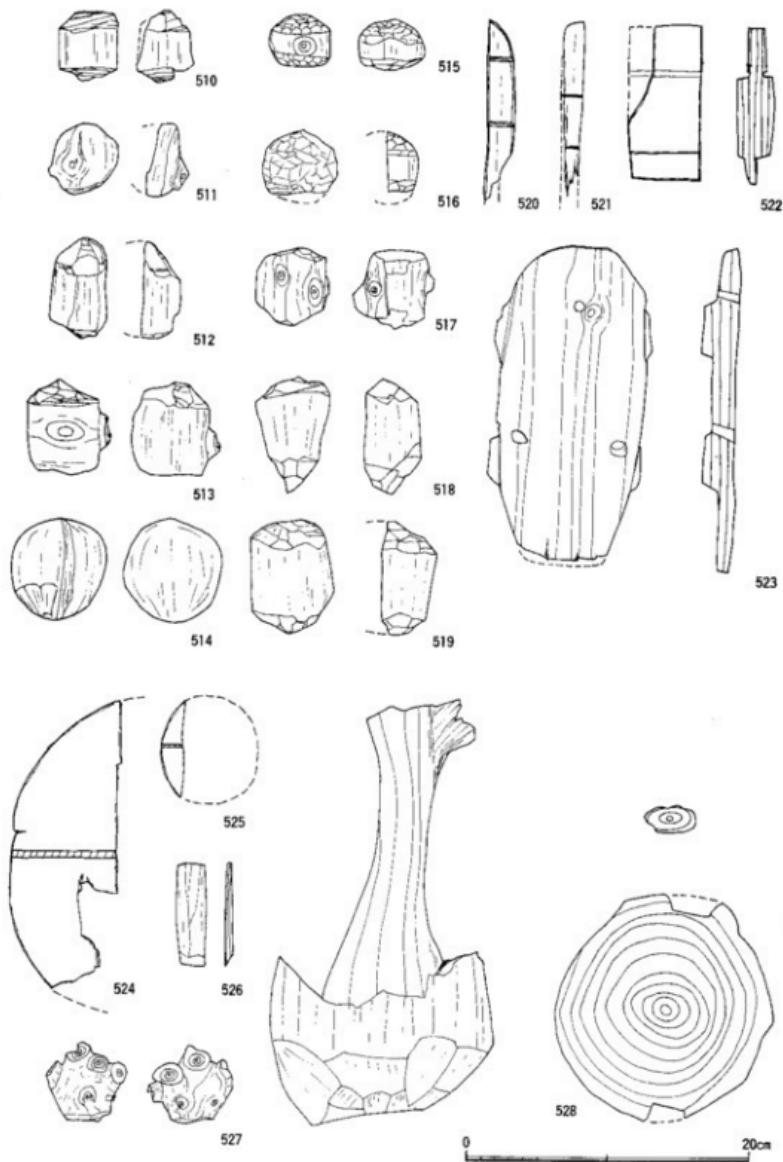


図-36 木製品(510~523溝3、524土灰4、525包含層、526土灰7、528ピット62)その2

(494) は、正方又は長方形の薄い板材である。丸く仕上げた隅を持つ。端部から12.5cm、15.6cmのところに縫穴を持つ。両方共樺皮紐が遺存している。幅14.8cm、厚さ0.4cm、現存長29.0cm。両面とも平坦であるが。一面は平滑に仕上げ、他面は未調整のままである。(495) は、薄い正方形の板材。四隅は斜2段に削り取っている。両面に幅5cm位のノミ刃痕が顯著にのこる。全体に荒い加工で手に触れたら凹凸が直ぐわかる。横幅13.4cm、縦幅15.5cm、厚さ0.7cm。柾目材。縫穴はなく、どのような用途か不明である。(496) は、横櫛である。歯部は一部欠損するが、ほぼ完形に復元しうる。背はわずかに円弧を描き、断面二等辺三角形である。歯の切通し線は背と平行する。歯の数は、39本/cmである。長さ12.0cm、幅3.0~3.4cm、厚さ0.1~0.8cmである。(497) は、蝙蝠扇（かわほりおうぎ）である。幅1.4cm、厚さ0.35cmの板材を7枚重ねにしている。骨元は径0.7cmの木釘で縫じる。木釘は長さ2.9cm。先端部分は欠損しており長さは不明である。

#### 大溝2出土木器

大溝2は3区から検出した大溝で、検出面積3.5m<sup>2</sup>である。

(498) は、曲物の床板である。ほぼ円形を呈する。端部に2個の縫穴を連ねてあける。板目材。復元径18.6cm、厚さ0.6cm、(499) は、小さな杭状を呈する。方形の角材を一端は尖らせるように削り、他端は切断後隅を大きく削る。方径1.9cm、長さ12.0cm。(500) は、杓子状木器である。柄の先が欠損する。身は長方形のやや幅が狭いもので、先端は台形状に隅を削り取る。身から柄にかけて緩い削りを行ない、身と柄の幅の比率は、2.4:1である。身の幅5.7cm、柄の幅2.4cm、厚さ0.6cm、板目材。(501) は、横櫛である。鋸で細い歯を挽きだした小片。背はなだらかな円弧を描く。歯の切り通し線は背にそろえた曲線を描く。歯は、27本/cmである。断面は二等辺三角形である。現存長さ3.8cm、厚さ0.1~0.8cm、幅3.0~3.6cm。(502) は、大溝1出土の(492)と相似する。幅5.6cm、厚さ0.4cm、現存長1.5cmである。(503) は、小型円錐形の杭で、くさびとして使用されたものと思われる。削りは割合大きく面取りする。

(504、505) は、齊串である。2点共完形である。柾目材。長方形の短い板材の一端を半円形に丸く削り、その両下方に切り欠きを入れる。長さ6.2、6.4cm。幅は同一で、2.2cm、厚さ0.6、0.5cm。(506) は、樺皮紐が縫穴に付いたままの板材である。横側は両面生きるが、長い方は両方共欠損。幅2.0cm、厚0.4cm、現存長4.1cm。(507) は、三角形に削った薄板。尖先は少し幅を持ち、他端は横方向に板の厚さの中程まで切り込みを入れてある。遺物はこの切り込み部分から折損する。幅0.7~2.2cm、厚さ0.7cm。現存長5.0cm。(508、509) は、杭の先である。丸棒に削りを入れたもので、ほんの少しの自然面をのこし、削りを入れた部分から2cm程で切断している。削りは7、8面ある。先端は欠損する。このまま使用されたものか、杭の先だけが切り落され、残りの部分が再使用するために排棄されたものかだろう。

#### 大溝3出土木器

5区から検出した南北方向の大溝で、面積2.7m<sup>2</sup>である。

(510~519)は、木球である。丸棒を短く切断し、その端部を削り丸く仕上げたものである。仕上げ方はまちまちで、細かく削りを施したものから荒く雑なつくりのものまで各種のものがある。(511、513、515、517)は、雑な造りで、木のふしがそのままのこるものである。ふしのある部分を意識的に使用しているとも考えられる。(514)を除く他のものには自然面が部分的にのこしている。径3.8~8.2cm。(520)は、刀子状木製品である。鋒はフクラ付で、棟は角棟、区は方区、断面は片刃切刃造である。茎の先端は欠損している。刃長9.4cm、幅1.8cm、茎の幅1.1cm、厚さ0.2cm。(521)は、木簡である。幅1.6cm、厚さ0.2cm、長さ12.6cmの残片である。墨書は、一部だけで判読出来ない。(522)は、建築雑形部材である。一部を欠損するが、ほぼ完形である。平面長方形を成し、両端は薄く長方形に造り出す。一方はやや厚く、他方はやや主軸を異にして薄く短い。長さ11.0cm、幅5.1cm、厚さ2.6cm、両端は、1.2、0.6cm。(523)は、下駄である。台板の形態は、小判形を呈し、鼻緒孔は、前方中央に一穴、後方に二穴をやや斜方向にそれぞれ穿たれている。現存長22.5cm、幅10.6cm厚さ1.6cm。

#### その他の木器

(524、525)は、大小曲物の底板である。復元径25.8、7.6cm。(524)は、土塗4、(525)は、2区包含層出土である。(526)は、長方形の板材で、一端を斜めに削り落している。幅2.2cm、長さ5.4cm、幅0.4cm。土塗7。(527)は、木球である。ふしが10個みられる。雑な造りである。径約5.6cm。土塗7出土。(528)は、ピット62柱底である。下端は荒い削りで切斷している。一部自然面をのこす。径16.0cm。

#### その他の出土遺物

第1、2次調査によって、縄文土器、埴輪、サスカイト石器、鉄滓、轆羽口等が出土した。縄文土器は、晩期後半のものであろう。埴輪は、家形埴輪の底の部分である。鉄滓は、20、78gのもの2点。轆羽口は、内外径2.7、7.3cmを測る。色調は、赤褐色、胎土は精良である。

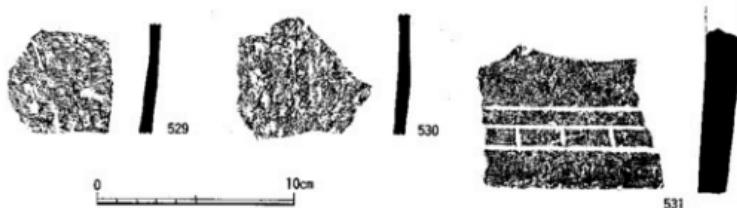


図-37 その他の出土遺物

## 第5章 まとめ

### 第1節 水利と小字

当地域は、延喜式・和名抄にいう河内国安宿郡の尾張郷にあたり、現在の柏原市片山町、玉手町、円明町に含まれる。近年まで農業経営が栄んでいたが、交通が便利なところから急速に商工業用地あるいは住宅地として多くの建物が建立されるようになった。しかし、古代の土地制度による条里造構が整然と遺されている地域であり、柏原市教育委員会では、小規模な開発に対してもできる限りの調査を実施している。今回の調査は、その中で条里に関わる遺構を検出し、時期や規模等を知るべき重要な新知見を得たので若干の整理をしてみたい。

条里の規模については、石川及び大和川と玉手山丘陵の自然地形に大きく制約され、玉手町と円明町の中間地点まで最大幅南北12町、東西6町の区画を持つ。この南限あたりで条里線の乱れが生じるが、これは、石川の屈折による乱れなのか当初から計画されたものか不明である。

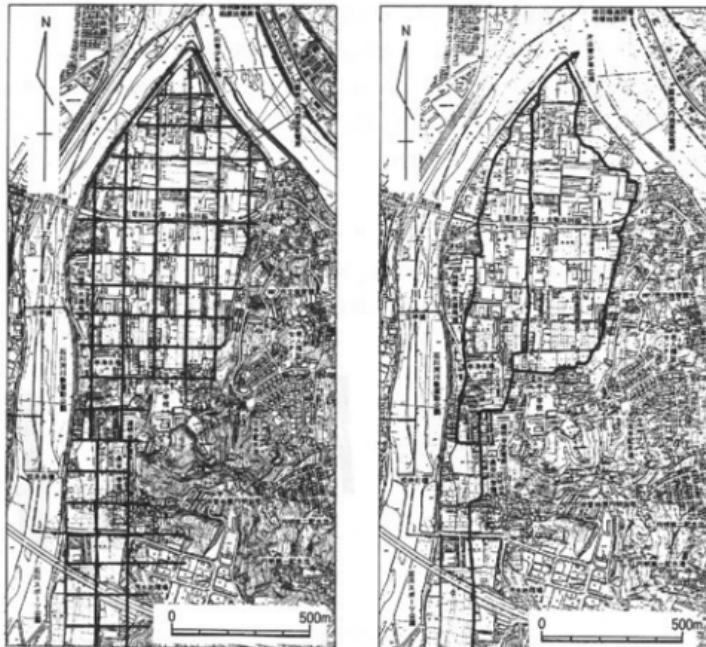


図-38 条里と水利



図-39 地籍図

しかし、同一郡内の同一郷に属する地域の条里線の乱れは、全国的にも条里として認められる中で類例がなく、前者の可能性を指摘しておきたい。

玉手山条里の施行時期については、今回の調査及び過去の調査成果（試掘調査及び立会調査）による結果では、平安時代後期まで遡り得ないと云える。しかし、条里の南東隅の一画の調査という事や、石川の東岸に弥生時代集落が存在する事、条里線上に大津道の比定地がある事等考慮すれば、当時期以前の古地割が存在した可能性があり、今後より多くの調査機会に条里遺構のみならず条里下層遺構の検出に努め、その時期や範囲、あるいは土地利用がどのように成されているかを追ってみたい。

玉手山条里の水路は、条里ほぼ中央部を北上する主水路と石川堤防際及び玉手山丘陵際を分流する2支水路がある。この水路は、円明、玉手、片山地区の灌漑用水路として、一般に円明水路と呼ばれ、市域内延長1.7km、市域内流域面積1.5km<sup>2</sup>（柏原市土木課 昭和48年）を占める。当条里開発においても主水路として継続してきた可能性が強いと思われる。石川東岸際や玉手丘陵際の2水路は、この主水路を補うものである。

安宿郡内は殆んど山地丘陵で、平地は当地区の南北に狭長な部分だけである。しかし、下記の諸文献によると、

『荒陵寺御手印縁起資材長』

田園

安宿郡伍条菱沼里捌拾箇坪

『信貴山資材宝物長』

志紀定子施入地 反中之田五反畠式反

在安宿郡二条追里

四坪東一

畠一条次田里 坪者

承平元年八月三日施入

沙弥正如施入畠五反二佰歩

在安宿郡心条池原里 一・二坪内

延喜十六年施入

とある。安宿郡には、一条・二条・四条・五条とあり、さらに坪名と地割が示されている事から条里が存在した事が明確である。しかし、当地区的地籍図による名称において、条里坪の名称が残っていない、復原の手懸りがない。

今回の発掘調査によって、条里規模、時期に重要な成果を与えたと考える。しかし、さらに確認すべき諸問題も増したとも云え、今後できる限り多くの機会に調査を実施するように努めていきたい。

## 第2節 遺構と遺物

今回の調査によって出土した遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代までの幅広い時期のものである。しかし、その中で、縄文時代から古墳時代までの遺物は、各数点であり、2次的な混入の可能性が高い。

縄文時代の遺物は、土器と土偶がある。土器がいずれも晩期に属する事から、土偶も同時期と考えたい。縄文時代の遺跡は周辺になく、新発見の遺物である。弥生時代の遺物出土地は、周辺に3地点有り、この3地点のいずれかの遺跡に先行する集落の遺物と考えたい。つまり、石川東岸、玉手山丘陵先端、安福寺横穴古墳群の丘陵上の3地点である。今後の周辺の調査に注目しておきたい。

弥生時代及び古墳時代の遺物は、石器及び埴輪片であり、前述の集落あるいは玉手山丘陵上にみられる古墳からの流出であろう。

鎌倉時代の遺物は、出土遺物の大半を占め、多種にわたる遺物がある。瓦器椀、瓦器皿、瓦質土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、鉄滓、礪羽口、木器等がある。

瓦器については、従来の編年に従うならば、12世紀前半から14世紀前半までの時期の遺物がある。時期別出土率は、12世紀代(24.7%)、13世紀代(73.5%)、14世紀代(1.8%)である。主要遺構の出土遺物(瓦器)の傾向は、大概3時期の画期があり、12世紀中頃、13世紀初頭、13世紀中頃である。第1の画期は、当遺跡の最初の遺構が掘削される時期である。この時期より古い遺物については、数量も少なく、当地区に移住する以前の持ち込み品であろう。

第2の画期は、多くの遺構が掘削され、住人の数も最も多く活動的な時期で、当屋敷が最盛期を向いている。第3の画期は、多くの遺構が廃絶する時期であり、わずかな痕跡がみられるだけである。この事は、当遺跡は約百年間前後の短い命運で誕生し、あっという間に消滅してしまった事を示している。

鎌倉時代の遺物で次に多く出土したのは、土師器の皿である。土塗16には、大小皿が200点近く出土した。一括遺物であり、形態及び胎土の分類により今後の土師器大小皿の当地域における編年に貴重な資料であり、また、他の遺構出土の瓦器椀とのセット関係も注目される。

遺構 時期	第2次調査						
	第1次 調査	大溝1	大溝1	大溝2	大溝3	土塗	ピット
1100							
1200		↑					
1300	↑	↓	↑	↓	↑	↓	↑

表-1 主要遺構変遷表

須恵器や陶磁器は、出土量は少なく、出土土器量の1～2%にあたると思われる。土釜では口縁端部が「く」の字に短く外反する形態のものが大半を占め、内頬気味に立ち上がり口縁端部外面に段を持つ形態のものは1点も出土しなかった。

鉄滓、驥羽口、砥石等の小鋳冶関係の遺物は、数量的に少量であるが、当屋敷内で使用する鉄器の管理及び再生を小規模ながら実施している事を示している。

木器類は、大溝1～3等において多量に出土した。割合遺存状態もよく、建築部材、枕状木器、曲物、木球（織機に関わるものと考えられる）、棒状木器、横櫛、蝙蝠扇、木釘、齊串、刀子状木器、下駄等多種に及び。

遺構は、条里区画の南東隅の一画に集中し、大溝が東西及び南北方向に巡っていると考えられる。立地的には、鎌倉時代の武士及び土豪等の居住として理想的な場所にあたる。つまり、玉手山丘陵の麓の開折谷の入口にあたり、わずかながらの水の供給があり、石川から取水するにも管理に適した位置である。農業経営に秀てるだけでなく、自己防衛を必要とする当時の世相から考えても優秀な場所である。馬の歯が出土している事からみても、石川の川岸や玉手山丘陵上に武士団が馬上訓練していた事を想定しても大過ないようにも思われる。

建物については、第1、2次調査を通じて計7軒の建物が検出された。それぞれ明白に時期を示されないが、出土遺物による傾向からみれば、13世紀代を中心とした時期の遺構であると思われる。規模は、それぞれの建物で全容を検出した訳ではないが、比較的小さい（2間×2間、2間×3間）部類である。これは、当地区の主要建物が調査区の北側にある可能性が高い事を示し、小規模建物は、自給自足による経済から、鍛冶、鑄物師、皮造り、檜物師、窯銅、織機等の分業を受け持つ家人・郎等・手工業者の住屋と考えられる。建物以外のピットについても今回は明確にされなかったが、同様の性格を持つものであろう。

各種の土塙が31個以上検出されたが、この中で、特に注目したいのは、土塙5、16、18である。土塙5は、長期間にわたり熱影響を受けた痕跡があり、多量の凝灰岩を含んでいる事も興味深い。土塙16は、円形土塙で埋土中多量の遺物が出土した。器種は単純構成で一括遺物である事から編年基準となり得るものであろう。土塙18は、窯状遺構である。上部構造は不明であるが、周辺に多量の炭や灰が堆積し、底部や側面の壁は固く熱影響を受けている。どのようなものを焼成したかは出土遺物もなく不明である。窯体構造は、地山を掘窪めた半地下式のもので、上部構造はさだかでないが、さして高温に至らないだろうと推せられる小規模窯である。当調査区出土遺物の胎土と類似した粘土が周辺に多数産出する事から、また、粘土採掘坑と思われる土塙もあり、瓦器や土師器の焼成窯の可能性が濃厚であると云える。

# 図 版



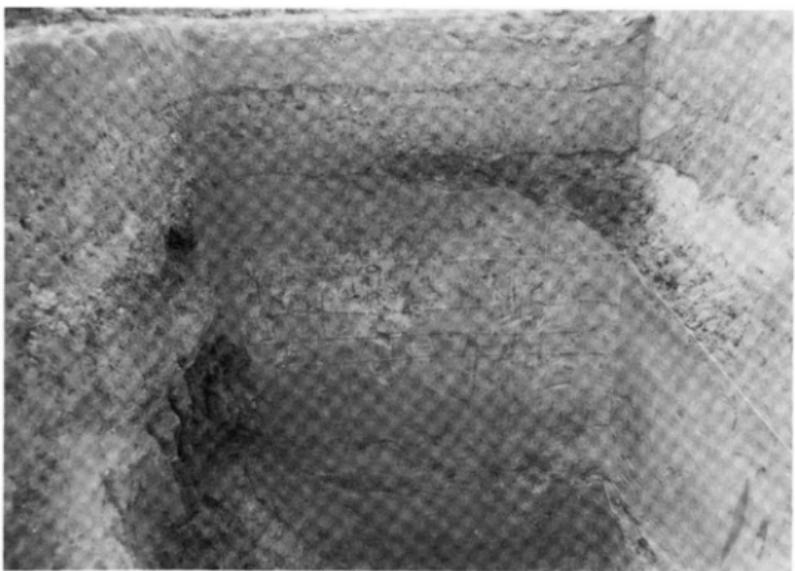
調査区北側風景



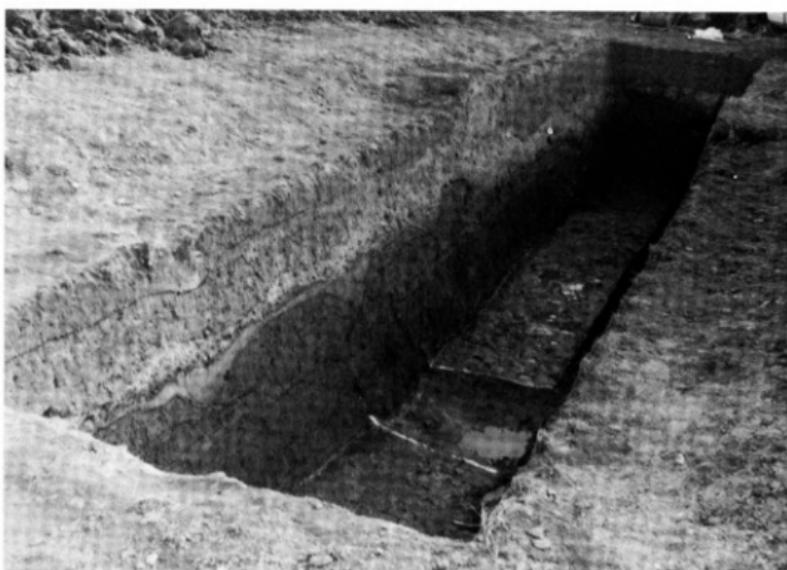
調査区東側風景



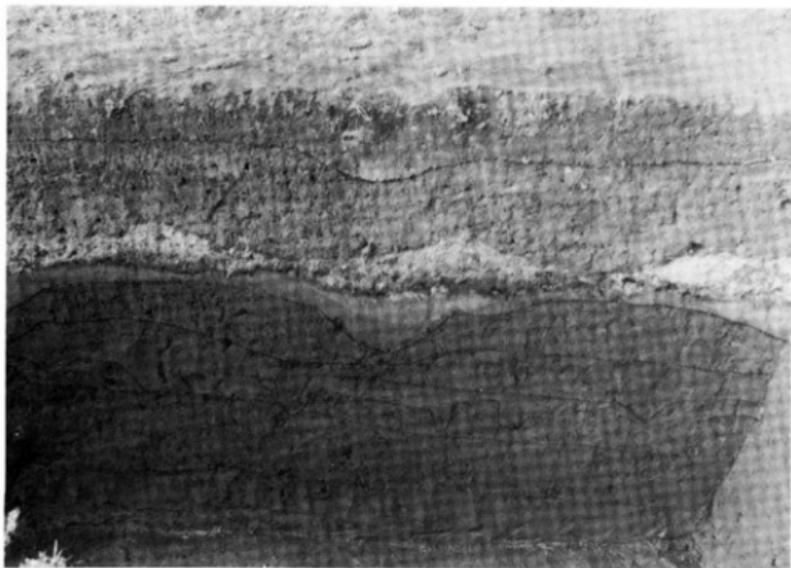
第1トレンチ全景



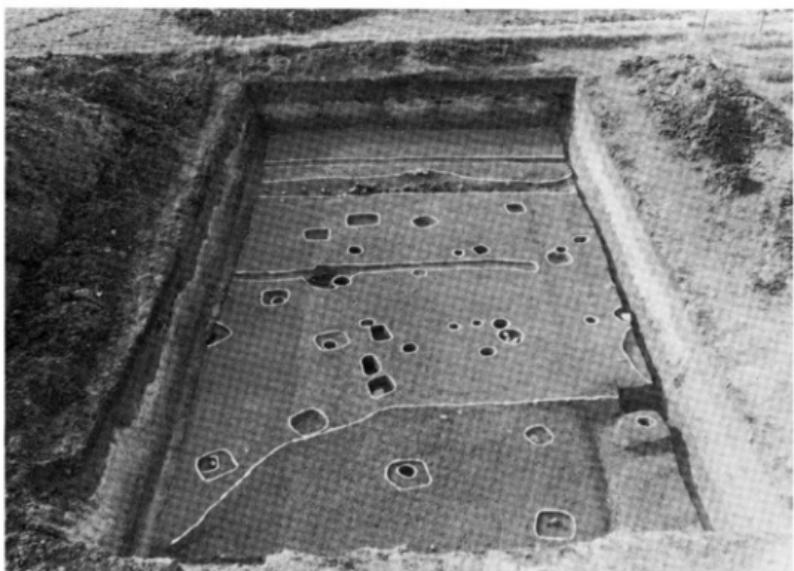
第1トレンチ条里下層地積土



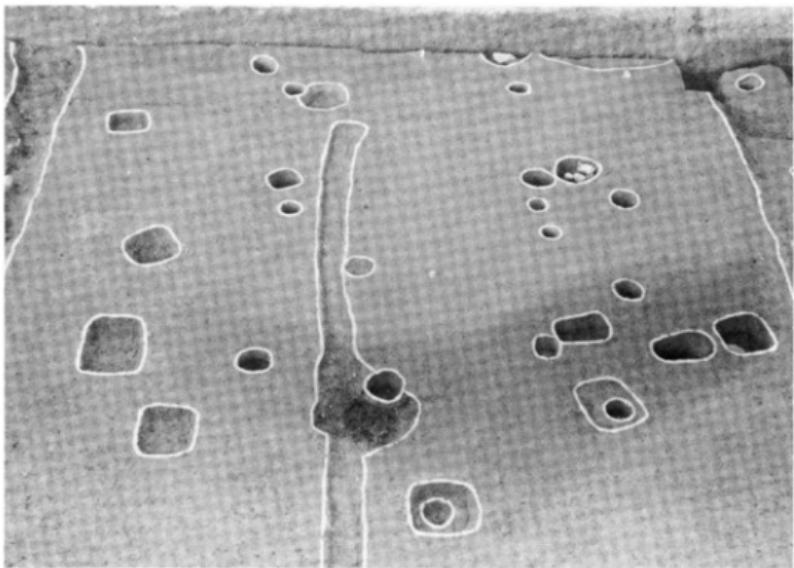
第2トレンチ全景



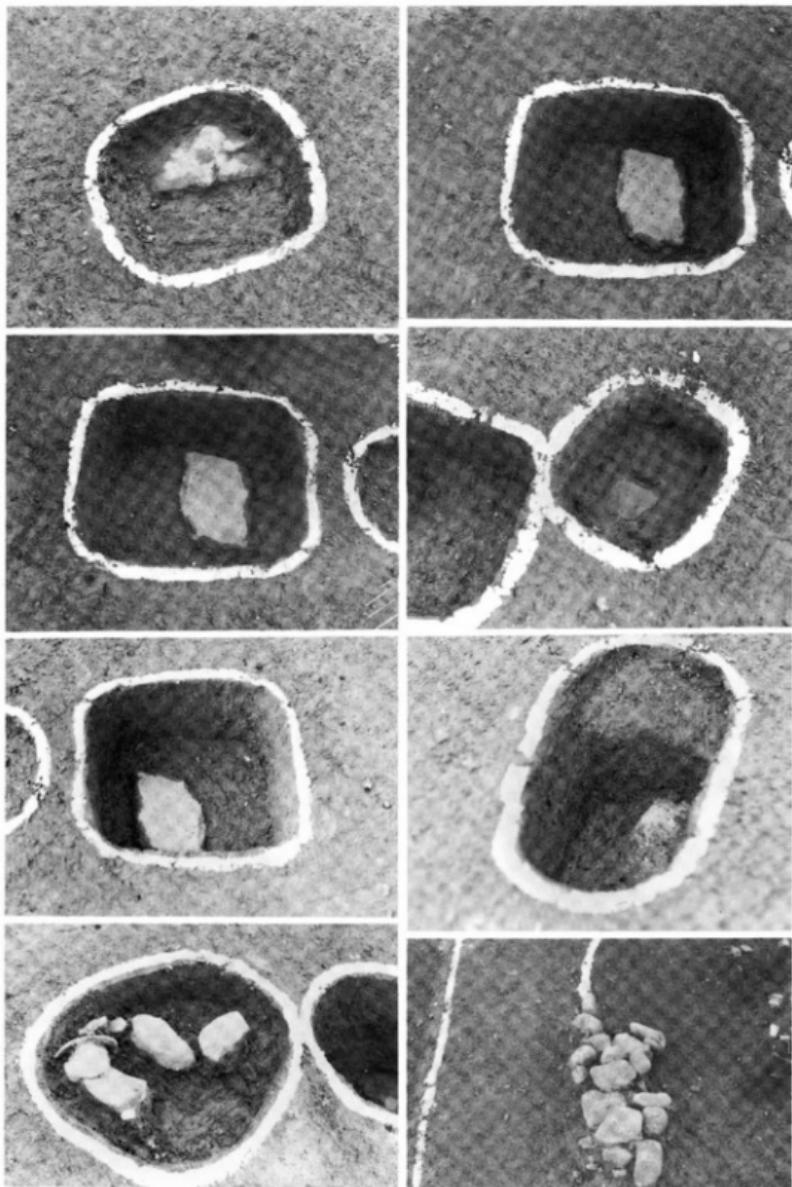
第2トレンチ珪畔



第3トレンチ全景



第3トレンチ建物群



石を使用した遠標

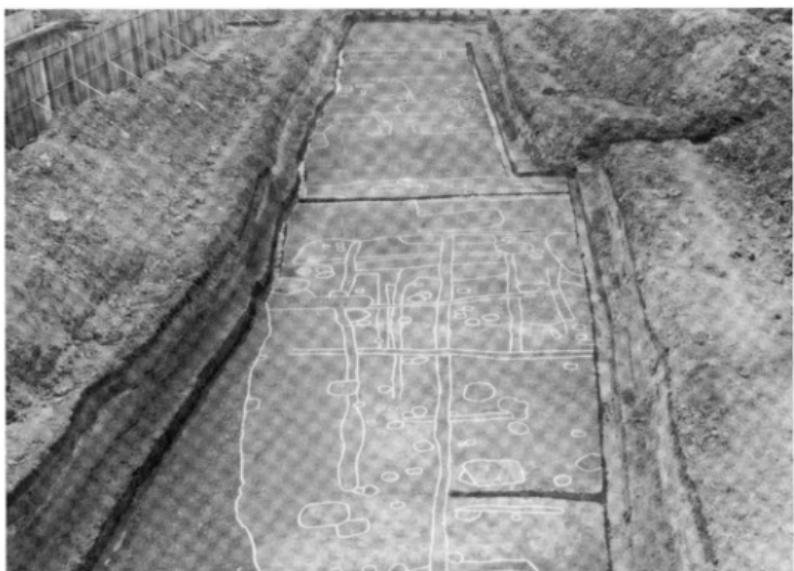


第3 トレンチ調査風景



第4 トレンチ全景

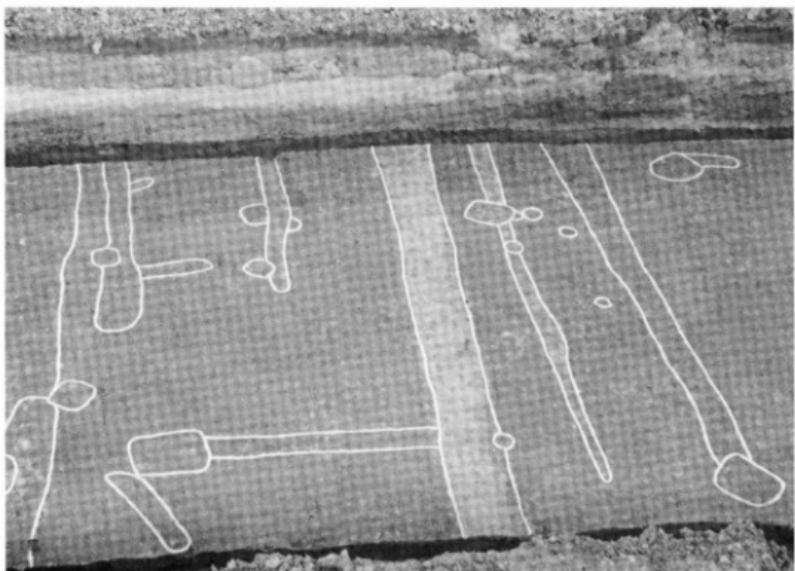
圖版七 第二次調査区全景



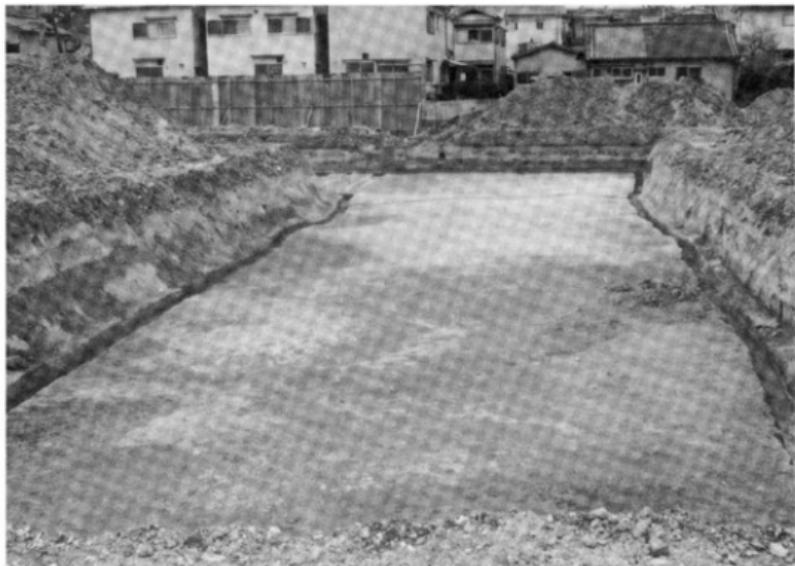
遺構掘削前



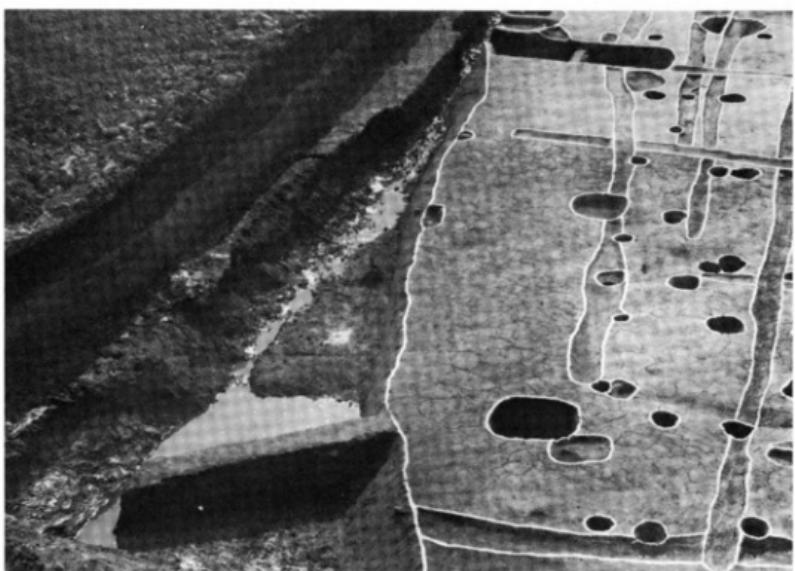
遺構掘削後



第5区



第6、7、8、9区



大溝1全景



大溝1遺物出土状態



大溝2全景



大溝2断面



大溝3全景



大溝3断面



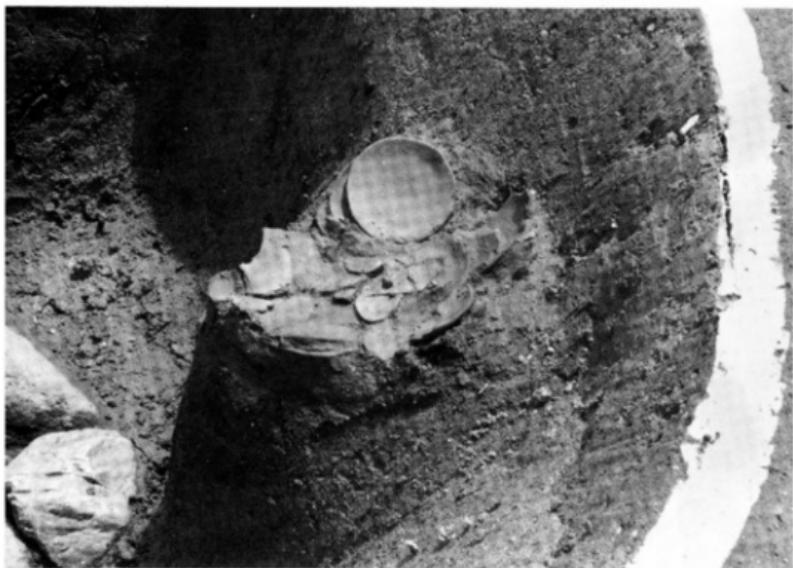
大溝3遺物出土状態



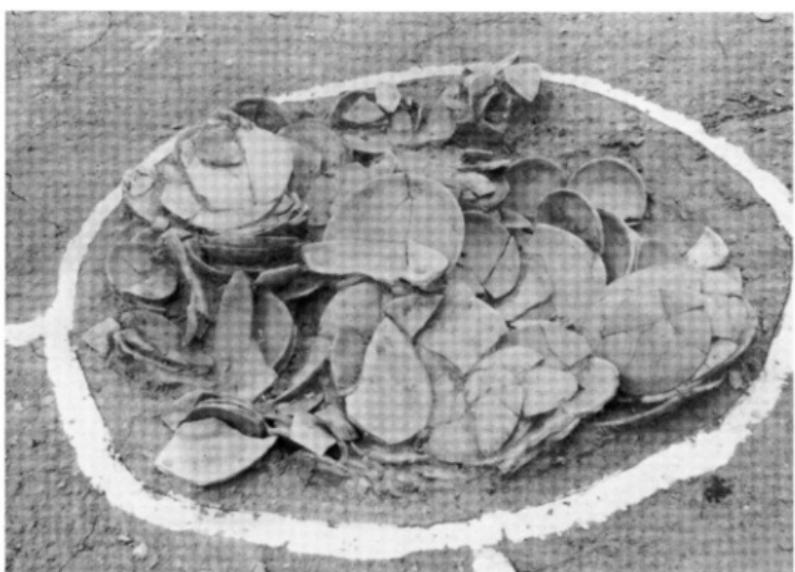
大溝3遺物出土状態



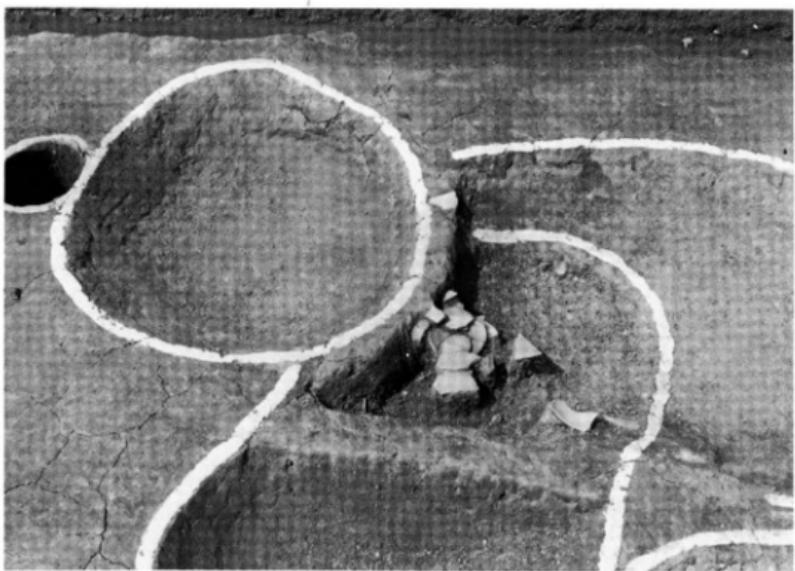
土塚 7 全景



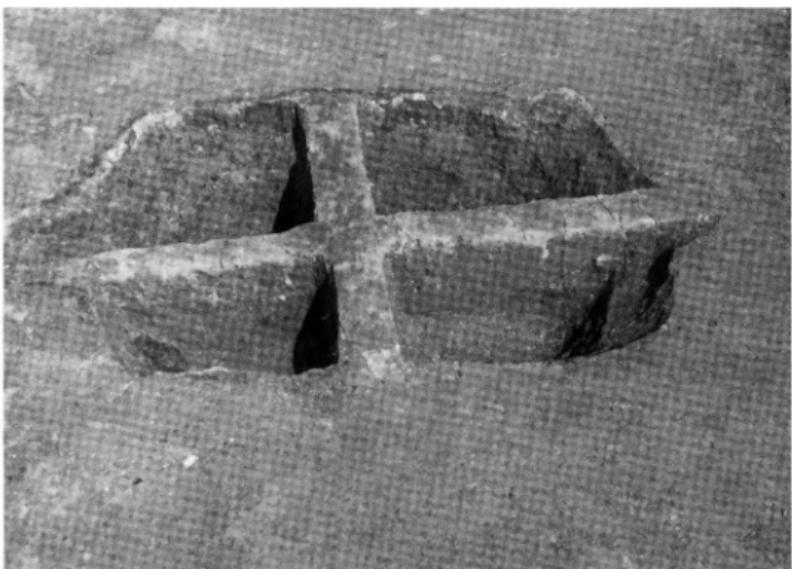
土塚 7 遺物出土態



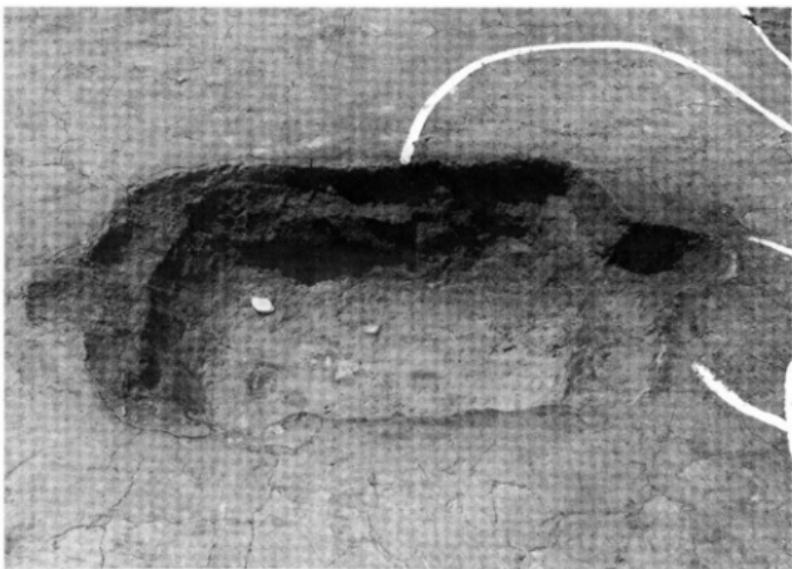
土塙16全景



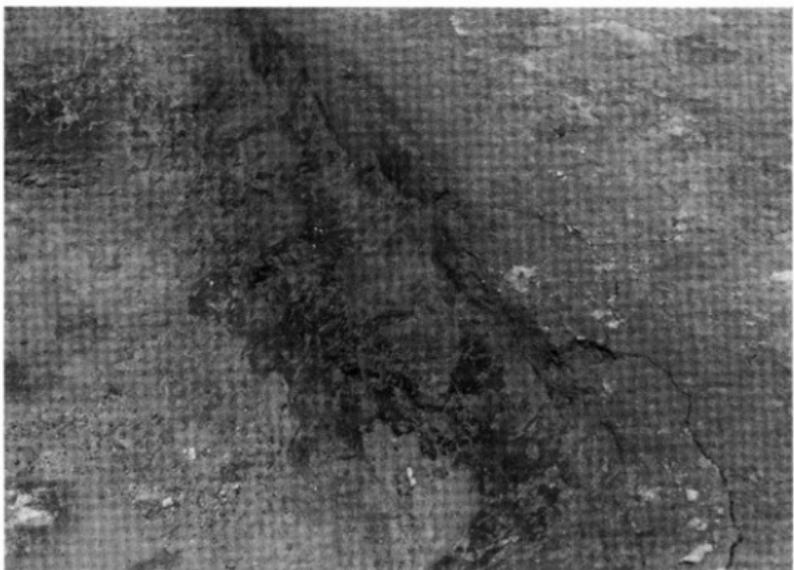
土塙16遺物取上後



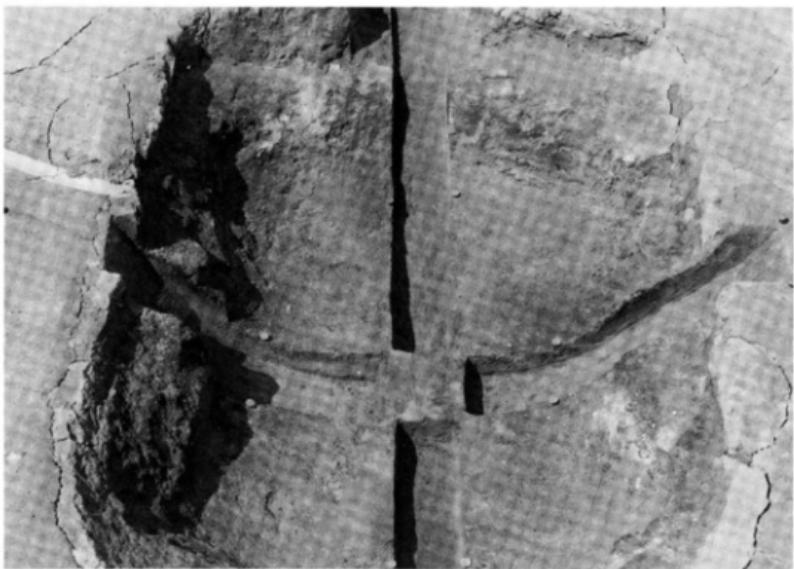
土坡18全景



土坡18掘削後



土塙18側壁



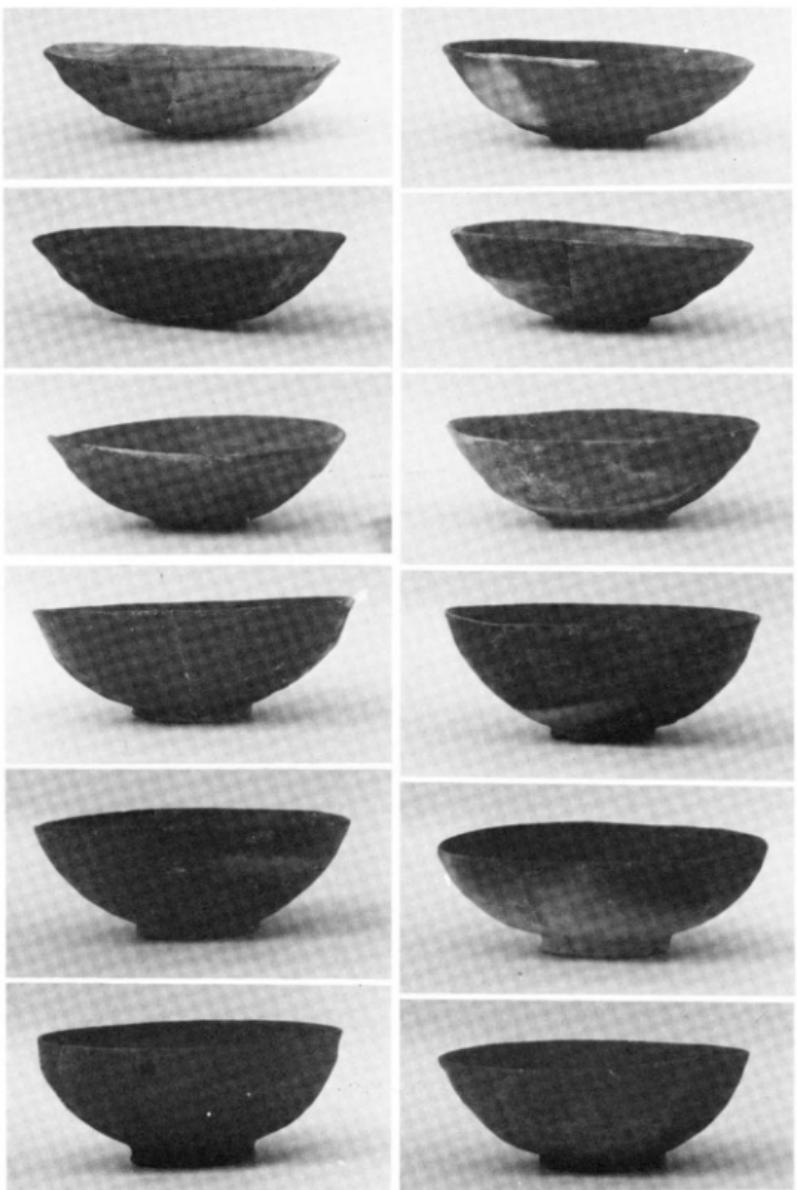
土塙18サブトレンチ掘削後



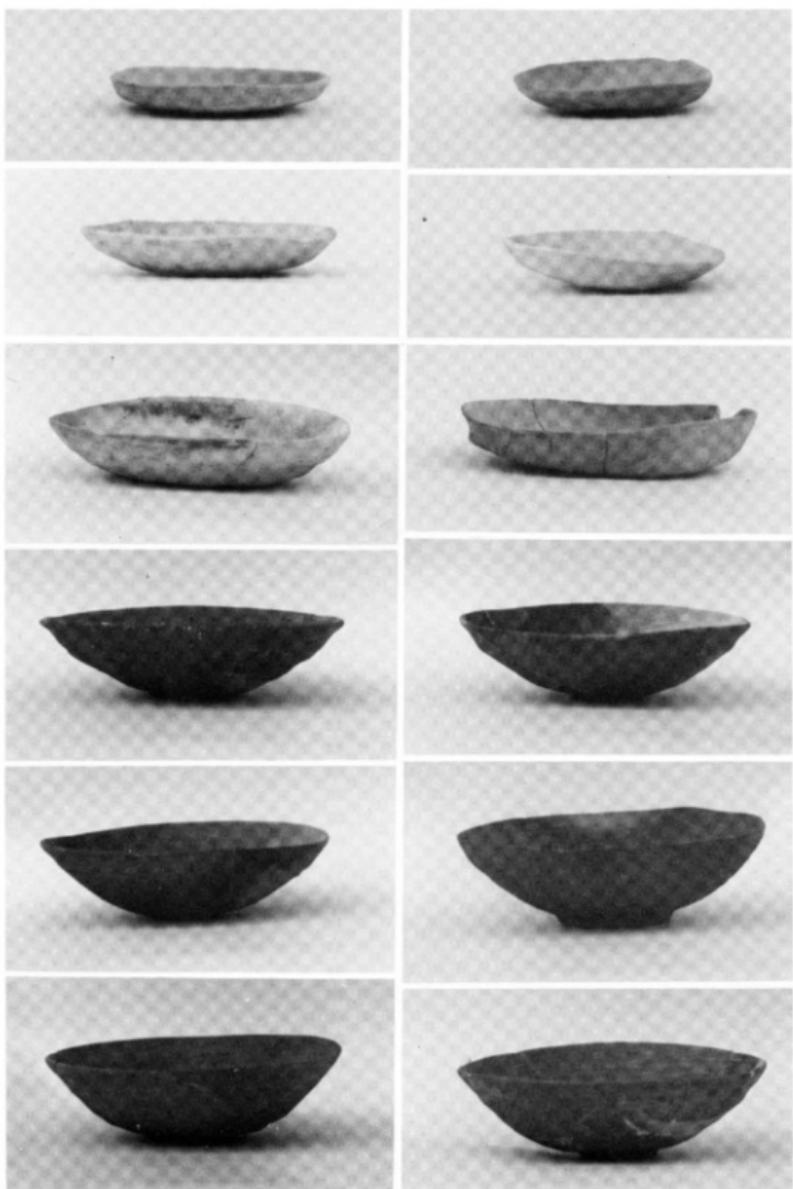
第2調査区造構捗削風景



降雨後の風景

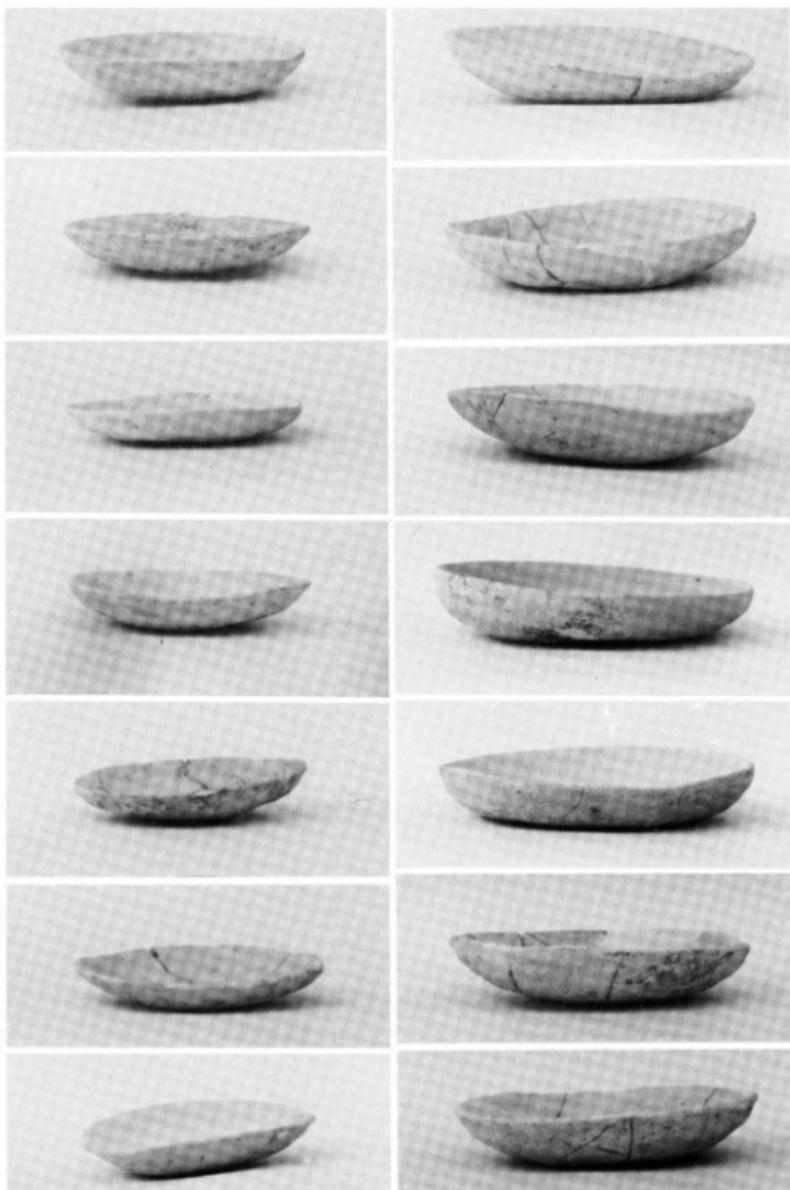


大溝 1 出土遺物

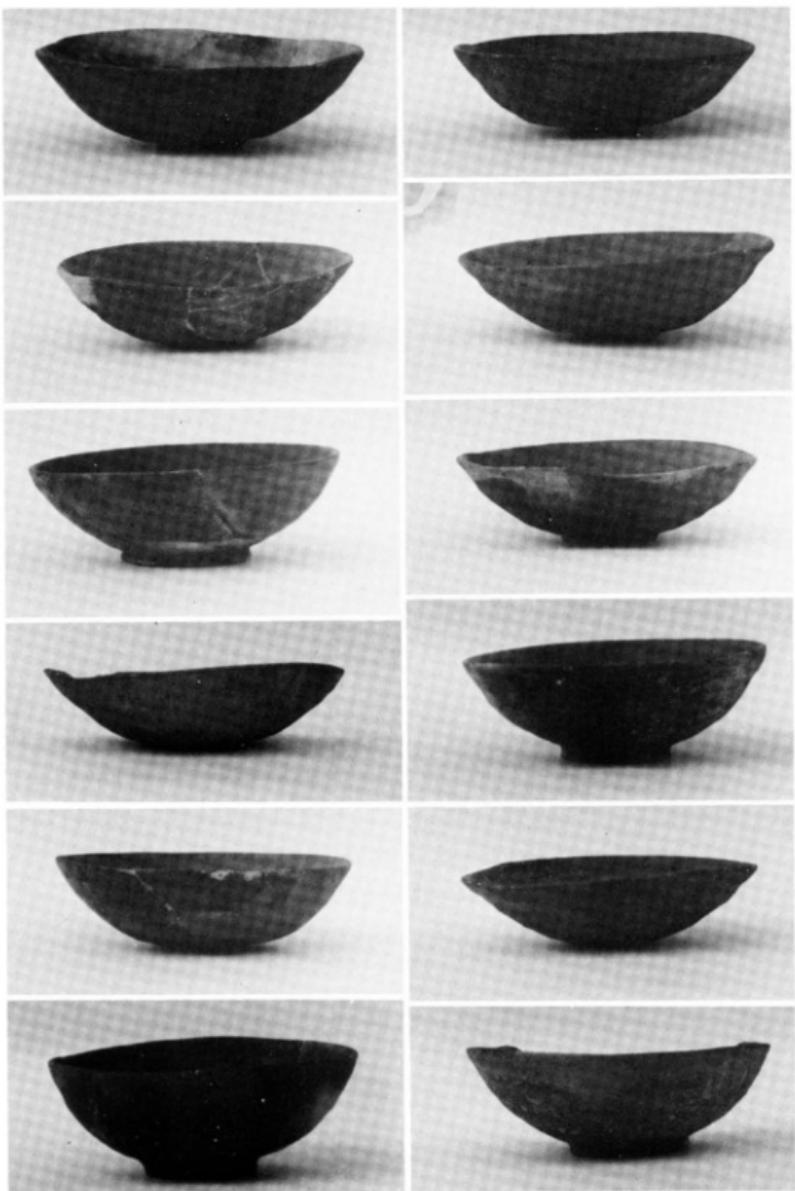


大溝 1 出土遺物

図版二十 出土遺物 その三



土坡16出土遺物



包含層出土遺物

## 玉手山遺跡

玉手中学校用地内埋蔵文化財調査

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 柏原市安堂町1番43号

TEL (0729)72-1501

発行年月日 昭和60年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

